

理の律者は笑わない

バイクに乗ったまま戦闘だって!?

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

パツと思いついた崩壊3rd×ヒロアカ。

ブローニャが主人公です。

ダブルパロディによる設定改変が存在します。

連載開始しました。不定期更新です。

原作（崩壊3rd）既プレイ向け。大量のネタバレを含みます。

目次

登場人物紹介

Profile: Bronya Zaychik | 1

Profile: Theresa Apocalypse | 4

本編

理の律者は笑わない | 7

ブローニャ：オリジン | 11

邂逅 | 18

入学試験 | 22

テリテリく♪成績発表く♪ | 28

Q. 初日から除籍宣言があるって本当ですか? | 33

Bronya File Special 『ホームショップ』 |

闇の胎動 | 42

戦闘訓練① | 49

戦闘訓練② | 56

戦闘訓練後 | 61

ヴイラン強襲① | 68

ヴイラン強襲② | 74

外伝【個性災害：『崩壊』】

EX (I) 崩壊の産声 | 79

登場人物紹介

Profile : Bronya Zaychik

名前 : ブローニャ・ザイチク
Bronya Zaychik

性別 : 女性

年齢 : 13歳 (第2話時点)

身長 : 147cm

体重 : 40kg

誕生日 ? 8月18日

出身地 : シベリア

好きな物 : ホム ゲーム

個性 : 武装創造

自分が見て、触れて、構造、材質を理解した『武装』を創造する。
八百万は『生物以外のあらゆる物を自分の脂質で創り出す』ことが出来るがブローニャは『武装』を創造することしか出来ない。

ブローニャが使用する武装 (重装ウサギ19c以外) にはいずれも原本が存在し、それをブローニャが完全理解するまで創造をすることは出来ない。完全理解にかかる時間は物にもよるがだいたい二週間前後ほど。そのためブローニャはできるだけ汎用性の高い武装を好んで使用する。

重装ウサギ19cだけはブローニャが現物を見て創造したものでなく、いつの間にか創れるようになっていた模様。この理由は当人も分からないらしい。『ウラルの銀狼』時代には創造出来なかったと本人は言っているが……？

キャラクター

後述のある出来事がきっかけで感情の起伏が殆ど無くなってしまった。完全に感情を失っているわけではない。一部事象に相対し

た時は彼女があまり見せることの無い姿を見ることが出来るだろう。ホムというキャラクター（この世界では実在の人物としても存在しています）に対する愛は一級品であり、それは自身のコーディネートはどこかに必ず入れるほど。

性格は年不相応に大人びており、物事に対し非常に合理的な考えをする。裏を返せばそれ以外の考え方を考慮しない一面もある。しかしオールマイトとの出会いにより、『余計』なこともそこまで悪くないと時折思うようになってきているようだ。

誰に対しても丁寧語で接するが、気を許した相手や自分への態度が悪い人物に対してはシニカルで軽蔑な接し方が多くなる。

計算や機械類にはサポート科もかくやという程の見事なワザマエを誇り、『個性』の影響もあり物事の分析という分野に対しての適性が抜きん出ている。その分析力と機械類にめっぽう強いことを活かし、株でかなりの額を儲けている。その利益はオールマイトの貯金の半分に匹敵するとかしないとか。

ゲームは百戦錬磨の腕前を誇る。ジャンルの射程範囲はアクションはもちろんのことソシャゲやギャルゲー、リズムゲー等の広範囲にわたる。そしてどのゲームでもトッププレイヤー並の技量を保有している。最近のお気に入りにはDance Dance Revolution。

生い立ち

シベリアにて生を受けたが生後1, 2年で内乱が勃発。戦争孤児となり軍事組織にドナドナされる。読み書き算盤を習う前に人間のドタマを銃でぶち抜く方法を教わり、それから数年で『ウラルの銀狼』と恐れられるほどになった。

しかしその生活は■■■■の登場により閉幕を迎えた。自分が赴いた戦地を更地にした彼に抗う術を非常に残念なことにその時の彼女は持ち合わせていなかった。

■■■■にハイエースされた彼女は彼が秘密裏に運営する孤児院に

Profile:Theresa Apokalypse

名前：テレサ・アポカリプス^{Theresa Apokalypse}

性別：女性

年齢：41（筆跡はここで途絶えている）

身長：145cm

体重：38kg

誕生日？3月28日

出身地：北ヨーロッパ

好きな物：漫画 ホム ゴージャジュース

個性：誓約の十字架

黄金に煌めく巨大な十字架を召喚する。

召喚した十字架の中から射出された剣や矛での剣戟でヴィランを蹂躪するのがテレサの基本戦法。

十字架から射出された兵装には自他問わず任意の触れた対象に『制約』を付加する効果が存在する。例えば十字架から飛び出した鎖で相手の四肢を固定した場合、相手の『抵抗力』に制約をかけて穩便にヴィランを確保することが可能だ。

しかし対象が強靱な精神を持っていたりすると『制約』は効果を失ってしまうなどのデメリットあり。ちなみに『制約』の対象は実体を持つものに限定される。

『制約』は対象一つにつき一つだけ。自分に対してだけはその制限がなく幾重にも『制約』を重ねがけすることができる。

キャラクター

「世界一可愛い（自称）。

今年度から雄英高校に務めることになった新米教師。しかしヒーロー歴はあのオールマイトよりも長い古株。

性格は年相応に大人びた面と外見同様に子どもらしい面を併せ持つが基本的に仕事以外では天真爛漫な様子が多い。いざとなった時のギャップが凄まじく一部で人気になっているとかいないとか。

十字架が無いと夜一人でトイレにいけなくなる程に幽霊の類いが大の苦手。夜の廊下で合掌しながら黄金の十字架を背負って歩いている人がいたら多分彼女。

お気に入りの漫画は「ホムの大冒険」。密かに漫画内で登場する必殺技を真似して練習している。ちなみに実戦でも使ったことがあり中々効果的だった模様。

既におわかりだとは思いますが、ブローニャ程ではないがホムが好き。

生い立ち

出身は北ヨーロッパだが幼少期から20代前半頃までは日本で暮らしていた。理由は父親が先史文明の遺跡の発掘調査を北海道辺りでしていたからである。

その後も父の付き添いで他の国々を飛び回り、数年前に調査が一段落したために久しぶりに日本に帰国した。父の滞在期間中はその国で期間限定のヒーロー活動をしており、グローバル的な視点で見れば知名度は高めだったりする。

そして世界中を旅したヒーローとしての豊富な経験と、既にいくつかの科目で教員免許を取得していることを理由に雄英で先生をやってみないかと根津校長から打診された。

父に相談すると後数十年は日本に留まるつもりのようなだったので校長の申し出を快諾。晴れて雄英高校の教師に就職した。

家族構成

父：オットー・アポカリプス
母：カレン・カスラナ

本編

理の律者は笑わない

土砂降りの雨が容赦なく彼女らの頬を叩き、そして伝っていく。薄紫色の少女は地に膝をつけた鈍色の少女を。うっかり壊してしまわないように優しく触れた。

彼女はその身がずぶ濡れになっていくのを気にも留めず、心が憂色に塗りつぶされた少女の頬に。

「ゼーレ……」

「ブローニャお姉ちゃん。ゼーレは、大丈夫、だから」

吹けば霞のように消えてしまえばいい。ゼーレと呼ばれた少女の身体からは紫色の粒子がボロボロと流れ出して、それに伴い身体は少しずつ空へと溶けていく。

ブローニャは理解している。彼女は消えたくないのだと。

されど自分に心配をかけまいと、懸命に虚勢を、精一杯の見栄を張っているのだと。

助けられなかった、手遅れだった。

自分が代わりに『彼』の実験を受けたならば、ゼーレが犠牲になることもなかったのだろうか。しかしその考えは現実を受け入れることができないブローニャの自己防衛でしかなかった。

「ごめんね、お姉ちゃん」

彼女から発せられる粒子の量はその身がこの世界に留まれる時間があると僅かなのだと教えてくれる。

身体は寿命間近の蛍光灯のように明滅を繰り返し、その度脚先から存在が消滅していく。

「ゼーレ、私は……」

謝ろうと彼女を見上げたがゼーレはその華奢な指で口の前にバツ印を作った。

「ううん、いいの。お姉ちゃんのごめんなきいが聞きたいわけじゃないんだ。私の……お願いを、聞いて欲しいの」

崩れる身体を無理やり動かして、ゼーレはブローニャに抱きついた。崩壊の始まった彼女の身体の温度を感じることはもはやできない。ただ雨の冷たさだけがブローニャに触れた。

「生きて」

「——ッ」

「……やっぱり。お姉ちゃん、私の後追いつるつもりだったんでしょ？」

自分より年齢が低いはずなのに、今ブローニャの目には彼女が姉のように見えた。ぐしぐしと目を擦るが雨とか涙とかでぼやけてしまったわけではないらしい。

聖母のような微笑みをたたえてゼーレは言うことを聞かない子どもをたしなめるように諭す。

「私だって本当はブローニャお姉ちゃんと一緒に行きたいよ？ でも、ダメです。そんなことゼーレが許しません」

「……矛盾してる」

「むっ！ でも許しませんの強いから矛盾じゃない……はず」

タハハ、とゼーレはバツが悪そうに笑った。そしておもむろに抱きしめていたブローニャの身体を離して彼女の目を見つめる。

「ホントにダメです。約束ですよ」

「……わかった」

不服そうな姉の姿はゼーレの目には少し可笑しく見えたようだ。最期に見えたこの顔は自分が消えてしまっても永久保存版だろう。

その言葉に満足したのか、ゼーレの身体を保っていた緊張の糸が崩壊したのかは分からない。

急速になったゼーレの粒子化は彼女の全身を余すところなく飲み

込んでいき――

ゼーレという存在は、観測不能となった。

「ゼーレ、どこですか?」

ブローニャは立ち上がり、虚ろな目で辺りを見回す。声に答えるものは何も無い。ただ虚しく、ザアザアと雨音が響くのみだ。

「ゼーレ、ゼーレ」

まるで何かに取り憑かれたかのようにフラフラと当てもなく彼女の名を呟く。

取り戻せやしないと分かっている。

されど今はゼーレの消失を否定する自分の方がよっぽど強かった。

それでもしないと自分が自分でなくなってしまいそうで。

徐々に自分の視界が暗転していく。ああ、まぶたの裏には彼女ゼーレはいらるだろうか。

変わらぬ顔で『お姉ちゃん』と話しかけてくれるだろうか。

気を失ったブローニャの元へ足音が近寄る。

「……なんてことだ」

彼女の元についた枯れ木のように細い身体の男性は不意にその口から垂れた少量の血を拭う。

それは彼の身体によるものか、はたまた心によるものか。

傘を閉じ雨でその身を濡らしながらも、それを気にする素振りもなく少女を支えるには心許ない腕でブローニヤを抱えあげた。

「すまない」

いつもの『平和の象徴』は見る影もない。

消え入りそうな声でブローニヤにそう呟いて彼女と共にその場を後にした。

ブローニャ：オリジン

「……おはようございます」

「ああおはよう、ブローニャ」

彼は関係各所に宛てたメールをしたためる手を止め、声のした方へと顔を向ける。

寝惚け眼をこすりながらホム（崩壊3rd内のマスコットキャラクター）と思わしき存在。ブローニャは自身の装備のアクセントに起用するほどホムが好き。CV：大塚明夫氏）が全面にプリントされたパジャマ姿でブローニャは起きてきた。

一緒に暮らしてはいるものの、ブローニャは彼の親類でもなければ友人でもない。そもそも現在の彼女に親類というものは存在しない。

ブローニャ・ザイチク、13歳。今ひとつ感情のない乙女。

シベリアにて生を受けたが生後1、2年で国内で内乱が勃発。その過程で戦争孤児が多数生まれ、彼女もその一人となった。

内乱の理由は不明だがとある『個性』が暴走した余波によるものとされている。

孤児となったブローニャは軍事組織に引き取られ、読み書き算盤の前に銃の撃ち方を学び戦争の駒として育てられた。

それから数年のうちに彼女は兵器としての頭角を現し『ウラルの銀狼』という通り名で呼ばれ恐れられた。

それから更に数年、彼女がとある任務で戦地に赴いた時のことだ。彼女が現場に到着した頃には既に戦闘は終わっていた。

——たった一人の男の手によって。

「ブローニャ？」

「……すみません。考え事をしていました」

「ああいや、口に合わないのかと思ってちよつとだけ心配だったんだ」

「いえ、そんなことはありませんので大丈夫です」

「そうか……」

机を挟み先の会話以外は終始無言で朝食を食べ、ブローニャは自分に割り当てられた部屋へ向かった。

「……参ったな」

洗い終えた食器を並べながら彼——オールマイトは考える。

彼女を引き取ることはほぼ突発的に決めたことだった。

罪滅ぼしのためか、その姿にいたたまれなくなつたのか、今となつては彼自身ですら分からない。しかしここで彼女を放っておけば口くでもない未来に繋がるような気がしてならなかった。

奴が存命していることが明確になつた以上、ブローニャが狙われる可能性は高い。

元サイドキックのような予知ではなく、単なる勘だ。されど今までの経験上、馬鹿にはできない。

「どうすればいいんだろうな」

オールマイトはソファに腰掛け天井を仰ぐ。その眼窩の奥の瞳は既に疲労困憊の色を見せていた。

部屋に入った私は一人ベッドで膝を抱えて壁に寄りかかった。

彼——オールマイトには感謝はしている。あのまま放置されていたら奴に回収されるか、野垂れ死ぬか……あの頃のように戻るしかなかったから。

が、どうにも解せない。彼の職業はプロヒーロー。その中でも絶大な力と人気を誇るNo.1ヒーロー。

しかし彼や彼以外のヒーローの業務内に「孤児の引き取り」というものはないはず。ネットには何件かその事例に該当するものはある

が、それらはいずれも親族や友達等の関係性を持った者たちだけ。
しかし私とオールマイトに關係性は皆無。血縁も親交も、何もな
い。

なら何故私を引き取ったのでしょうか？

聞いてもはぐらかされるばかり。

また何かされてしまうのではないかという考えが私の頭を掴んで
離してくれない。

分かっている。

見ず知らずの私を引き取ってくれた彼に、こんなことを考えるのは
恩知らずだって、間違ってるってことは。

でも私は――

「ゼーレ……」

伝う涙はあるけれど、顔は作り物のように無表情。

私はポテリとベッドに身を任せ、とどくはずもない天井に手を伸ば
した。

？

「あなたの仕事を見てみたいです」

「なんだい藪から棒に」

結局オールマイトへの疑念を捨てきれなかったブローニャはとり
あえず彼の人となりを観察するために職場見学を申し出た。普段の
行動にこそ彼本来の性格が現れる。自分を引き取ってからのオール
マイトは多少無理やり明るく振舞っていたとブローニャは感じてい
た。それがまた怪しくも感じたのだが……。

オールマイトは今まで必要最低限の会話しかさせてくれなかった
彼女が自分の仕事に興味を持つなんて思いもしなかった。むしろ
ヒーローというものの自体を嫌悪しているとさえ思っていた。

ところがどうだ、彼女は嫌悪感どころか少なくともヒーローというものに興味を持ってくれている。オールマイトは胸中に晴れ間が見えたような気がした。

「よし！　なら私が普段やってることとかバッチリ教えちゃうからな！」

「あまり張り切り過ぎると普段通りが見れないのでそこそこでお願いします」

「あ、はい」

まずオールマイトは私を連れて街に出た。

彼は目の前でヴィランと相対するといった緊急事態でない限りはやせ細った状態でいることを推奨されているそうなので、今日はその目で職務に勤しむ彼を見ることは出来なかった。

しかしヴィランを捕縛するヒーローを見ながらヒーローとは何たるかを聞くことが出来たので全くの無収穫というわけではない。

その後彼は不法投棄が多い海浜公園に行つてゴミの処理を始めた。

「最近じゃヒーローってのはヴィランを倒してもてはやされてはいるが、とどのつまりそのオリジンは奉仕活動なんだ」

そう言いながら海岸に不法投棄された錆び付いた軽自動車を押し潰すオールマイト。

不快な音を一瞬だけ奏でたそれはものの見事な鉄塊になった。

その状態にならないようにと推奨されていたのでは……？

「こういうゴミを撤去したり困っている人を助けたり。まあ最近のヒーローはめつきりしなくなつてしまつたが」

「ヴィランによる犯罪件数が右肩上がりだからでしょうか」

私の質問にオールマイトはうんうんと頷く。

「そうだね。ヒーロー飽和社会なんて言われてはいるが、それでも個性を使った犯罪はとどまるところを知らな——」

そこまで言ったオールマイトの口からは血が吹き出し、身体から唐突に煙が吹き出した。特に異臭はしないので水蒸気のようなもののだろうか。

煙が晴れた後に残されたのは家でよく見るオールマイトの姿だった。世間の人々はあのナチュラルヒーローの本来の姿がこのようなものだとは思えないだろう。

私はオールマイトから視線を外し、夕日が半分まで沈んだ海を眺めた。

「……オールマイト。ブローニャは貴方に謝らなければいけません」
「ブローニャは、貴方が怖かった。何の関係性もないブローニャを、何故引き取ったのが皆目見当がつきませんでした。だからまた、何かされてしまうんじゃないかと」

オールマイトはどんな顔をしているのか。その顔を見る勇氣は今の私にはない。彼は悲しんでいるのだろうか、怒っているのだろうか。

「ブローニャを気づかって色々してくれたのに、それを無為にするような考えを浮かべてしまいました」

更に謝罪を重ねようとすると不意に両肩に感触がする。クルリと逆方向に体の向きを変えられた私の目に映ったのはムキムキになったオールマイトだった。

「そんな思いを抱くのは当たり前さ。ブローニャ、君には何の落ち度もない。落ち度があるのは——私だ」

その巨体に見合わぬ小さな声で彼は話し始めた。

私に様々な実験を施したヴィランはオールマイトの宿敵だったこと。

刻まれた深い傷を代償にそのヴィランをあと一歩のところまで追い詰めたこと。

そしてそのヴィラン——AFOをとり逃してしまったこと。

「私は、助けられたはずなんだ。君の友達を」

「諸悪の根源はあのダサマスクです。あなたのせいじゃありません」

オールマイトはその言葉で気が抜けたのか一気にガリガリの状態に変化した。虚をつかれたように私を見つめている。大方、自分は恨まれているとも思っていたのだろう。それは違う。そんなことは私は望んではいない。

「ブローニャはオールマイトを恨んではいません。もしもを話しても仕方ないですし、何より建設的ではないです」

ゼーレは私が悲観に暮れているよりも、楽しく過ごしていることを望むはずだ。

そして私は、これ以上彼女のような被害者が出ることを望まない。

「私はゼーレのような被害者をもう出たくありません。だから、強くなりたくです」

ぐわんつと視界が揺れた。見ればオールマイトがそのか細い腕で私を抱きしめていた。

「ブローニャは……強いな」

「オールマイト程ではありません」

「腕っ節の話じゃない。その心のことさ」

「そうでしょうか？」

「そうだと」

約五分、私を抱きしめたオールマイトはおもむろに伸びをした。身体中からバキバキと音がなっている。相当お疲れの中私と歩いていたのだろう。

「さて、いつまでもシミつたれてはいけないな！そう、私は君の強くなりたいという願いに応える必要がある」

「ブローニヤ、君はヒーローになりたいかい？」

オールマイトの問い。私の答えはもう既に決まっていた。
「もちろんです。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いします」

邂逅

「ぼ、ぼぼぼぼ僕の名前はははは」

「緑谷出久、ですね。オールマイト、本当に彼なんですか？ ヒーロー志望が初対面の人にこれは少し難ありかと」

「単に女性が苦手ってだけじゃないかな？ ……多分」

何時ぞやにブローニヤのオリジンが始まった不法投棄多めの海浜公園に集まったのはナチュラルボーンヒーロー、その力を受け継ぐ予定の少年、そしてウラルの銀狼。

今回の目的は出久がオールマイトの個性『ワンフォーオール』を受け継ぐためトレーニングの目標と初日の訓練、そして同じくヒーロー志望のブローニヤと顔合わせをするためだ。

ちなみにブローニヤは既に『ワンフォーオール』のことをオールマイトから教えられていた。ブローニヤがその内容を聞いた時、彼女はうつすらと笑みを浮かべていた。オールマイトの信に自分は値するのだということがブローニヤの心をくすぐった。

オールマイトは同じヒーローになるという志を持った者が集まれば自然と士気も上がるのではないかと考えブローニヤと出久を会わせることにしたが、結果は冒頭のようになってしまった。

二週間ほど前に起こったヘドロヴィランの事件でオールマイトに生来の正義感を見込まれて彼は今この場に立っているはずなのだが、ブローニヤにはとてもではないがそうは見えなかった。

「いつまで震えてるんですか。取って食ったりしませんから普通にしてください」

「は、はいいい!!!」

「重症ですね」

「緑谷少年はブローニヤ少女と普通に対話するところから始めようか」

ブローニヤはオリジン以降からオールマイト以外の人にも接する

ようになっていた。

感情の起伏は未だに止まった心電図のように動くことはなさそうだが、時折ジョークのようなものを交えたり彼女なりに努力はしているようだ。

オールマイトからすればそれは喜ばしいことなのだが、如何せん何かトゲのある言葉遣いが多い気がする。一応養親としての立場もあるために少し、ほんの少しだけ不安になるオールマイトだった。

それから三日間、ブローニャが出久に電話をかけたたり訓練中に積極的に話しかけることにより出久は何とか女性への（現状対ブローニャ用にしなければならないが）耐性をつけることが出来た。

「長いようで短かったがやっと訓練に入れるな！」

「お、お手数お掛けしました……」

「謝るのはオールマイトじゃなくてブローニャにですよ」

「ごめんねザイチクさん」

「……ブローニャでいいです。いえ、むしろそっちでお願いします」

そして出久の血の滲むような特訓の日々が幕を開けた!!

出久はオールマイトが考案した『これで君もパーフェクトボディ！

アメリカン式英雄合格トレーニング!!』という名目の常人がやってもキツイと思われるようなメニューを日々こなしていく。

途中でオーバーワークでぶっ倒れる日もあった。

しかし彼はそのヒーローになりたい、オールマイトの後継に相応しくなりたいというガッツで必死に食らいついた！

だがここから原作通りの彼の頑張りを記しても、それはさほどの意味を持たない。

よってここからはブローニャが入試に至るまでの日常生活、その一部分をご紹介させて頂こう。

それはある日の昼下がりに。特にパトロールもないためオールマイトはリビングで一人珈琲を嗜みながら優雅なひと時を過ごしていた。「オールマイト、少しいいですか?」

ソファに座っていたオールマイトの頭上に影が落ちる。ふいと上を向いて見ればそこにはブローニヤがいた。あと数センチ近づけば額がくっついてしまうような距離にブローニヤがいた。

オールマイトは飛び上がりそうになった心臓と身体を落ち着かせる。珈琲を机に置いておもむろに彼女から距離をとった。

「何か用かい?」

「お金を貸して欲しいのです」

「いくら?」

「ざっと200万強くらいでしょうか」

「……何て?」

オールマイトの養子になって少しして彼はブローニヤにPC一式をプレゼントした。聞くところによると彼女は機械類には強い方らしくコミュニケーションの一助になるだろうかと思っ買ってきただのだ。

それから数日でルーターとHDDの買い替えを希望してくるとはさすがのオールマイトも予想していなかったが。しかも希望品のメモまで添えて。

そして更にブローニヤの注文は続く。外付けHDDを頼んだかと思えば次は計算ソフトを要求してきた。無表情なので彼女が何を考えて機械類を吟味しているのかはオールマイトは点でわからなかった。

いくらか物を買った後、彼女はそれ以上の要求をしなくなった。ちなみにオールマイトは彼女に年相応のオシャレ等が出来るようにとお小遣いは渡していた。

なりを潜めたかと思えばこれである。一体彼女の思考はどこへ向かうとしているのだろうか。彼は養父として心配でしかたなかった。

た。

「ゴホン！ 流石の私もそれは容認出来ないな。一応、理由を聞かせてもらってもいいかな？」

「そうくるとは思っていません。こちらをご覧下さい」

ブローニヤはオールマイトの膝にノートパソコン（これは彼が二番目に買ったもの）を置いて、少しだけ得意げにそれを開くようにジェスチャーした。

その画面には大きめの右向き三角形のマークが映っていた。この動画を再生しろということだろう。

カチリとその三角形をクリックしてみるといきなりタイトルが表示された。題名は『ブローニヤの！ 安心、安全、高収入の株取引講座！』とある。オールマイトはこめかみを抑えながら瞑目した。

彼女のその知識は半端なものではなかった。あまりこの手のものが分からないオールマイトに向けての懇切丁寧でわかりやすいスライド形式の動画での説明。そしてメリットデメリットの例を挙げつつデメリットのみを限りなく低くする革新的な手法の解説。

ここまでの知識を会得するのにどれほど努力したのだろう。オールマイトはそれがひしひしと伝わるその動画を見るだけで頭ごなしに否定する気は失せてしまっていた。

「……と、言うわけです。まずはテトラネットとFGIの株からいきたいと思っています。最近の二社はきな臭い話がありますが、そのうちまた株価が上がってしまうでしょう。故に今が好機です」

オールマイトは迷いに迷った末に、妥協に妥協を重ねてその重たい口を開いた。

「……100万からどうぞ」

数カ月後にはそれがオールマイトの貯金の半分に匹敵しそうな程に膨大になっていたのはまた別のお話。

入学試験

「ガッチガチですね」

「ぶ、ブローニャさんは平気なの？」

「もう幾度もVRでシミュレーションを繰り返したので抜かりはありません」

かの有名な雄英高校の門の前でブローニャと出久は歩を止めた。片やガチガチに緊張してスペランカーのようなカクツキを見せる縮れ毛の少年。

片や鉄仮面銀髪ツインドリルの少女という何ともミスマッチな組み合わせである。

ちなみに出久の服装は折寺中指定の学ラン。ブローニャは所謂戦乙女・戦車の服装だ（腕と脚の装甲は外してます）。

「とりあえず、しゃんとしてください。あの人ですらあなたの成長に驚いたのですから自信を持って」

（オールマイトに『緑谷少年を励ましておいてくれないか？』と言われたことは伏せておきましょうか）

「う、うん！ そうだよ、そうだよね！」

少しだけ足取りの軽くなった出久は少しだけ慢心してしまったのかも知れない。ブローニャの言葉を聞いてから初めの一步の勇み足で運悪く自分の靴紐を踏んでしまった。

「のわっ!？」

出久の唇が地面と接吻するまで残り一秒。さすがのブローニャでもそのレベルの速さで落下する彼を支えることは出来ない。かと言って重装ウサギ19cを出そうにも完全に間に合わない。

逡巡も束の間、『出久は助からない。現実是非常である』という結論を出そうとしたブローニャ。しかしその考えはあっさりと否定された。

床ペロ状態になると思った出久の身体が浮遊している。出久本人も状況がよく分かっていない様子だったので、彼が何かを発現しそうな矢に貫かれたり、心の奥底に潜むもう一人の自分が実体化したわけ

ではないようだ。

「大丈夫？」

浮かぶ出久の陰から顔を出したのは和らげな笑みを浮かべた少女だった。

彼女は出久をゆっくりと地面に立たせると両手の五指を合わせて出久の無重力状態を解除した。

「ごめんね、でも転んじゃったら縁起悪いもんね！」

どうやらその少女は自分の個性で出久を浮かせてあげたらしい。彼女はお互い頑張ろうね！　と言うとそそくさと行ってしまった。

「出久、お礼は？」

「じよ、女子と喋っちゃった」

「あの程度は会話には入りません。ブローニヤとの特訓の意味はなんだったんでしょか……」

「その節は大変お世話になりましたア!!」

「オイデク」

「わひゃあつ!!　か、かつちゃん!？」

ブローニヤに対して直角90度の礼をする出久に頭がトゲトゲの金髪男が話しかけてきた。ブローニヤはこんな人間でも雄英を受験するんですね、とぼんやり考えていたりする。

「俺の前に立つんじゃないやねえ！　ぶつとばすぞ！」

(ゴル○13……?)

傍から見れば中々に理不尽な怒り方である。出久は何か言おうと口を動かしたが既に彼は先へと行ってしまっていた。

「……あれは？」

「かつちゃん、爆豪勝己っていうんだ。僕の友達で……ほら、ヘドロヴィラン事件の時の」

「ああ、アレですか。普段からあんな感じなんですか？」

「うん。でも実力は本物だよ」

そうですか、と短く答えるブローニヤ。正直彼を友達と言う出久の気持ちは1mmも理解出来ないが、それを言えばまたテンパったりしそうなのでやめておいた。

「今日は俺のライブによるこそオ!! エヴィバデイセイヘイ!!」

プレゼントマイクの台詞と矛盾するがここはシャレオツなライブ会場ではない。実技試験の説明会場である。

「あれが教師になるのを考えると少しゲンナリしますね」

「ブローニヤさん、シーっ! シーっ!」

「うるせえ銀ドリルぶつとばすぞ」

「出久、コイツヴィランの工作員とかじゃないですよ?」

「——う、うん! 違う……と思うよ!」

「微妙な間を開けるなクソナードがア!!」

「こいつあシヴィー!!! そんじゃあ受験生のリスナー諸君! 実技試験の概要をざっくり説明してくぞオ! ちなみに俺の担当科目は英語だ」

「……尚更ゲンナリしますね」

ざっくり説明すると市街地を模した試験会場に仮想ヴィランのロボットが現れるからそれを倒したポイントで合否判定! ということらしい。その他各試験場に一体ポイントがない上に馬鹿みたいな巨大さを誇るおじやま虫が配置されるらしい。

しかし雄英の過去の合格者のデータとオールマイトの証言、その他諸々の要素を加味してブローニヤはヴィランを倒すだけが加点されるわけではないと予想していた。

プレゼントマイクの紹介の最中に出久と勝己がメガネのThe優等生のような人に叱られるというハプニングもあったが、ブローニヤはこの程度でへこたれるような出久ではないと理解している。勝己は言わずもがな自尊心が二足歩行しているような人物なのでフォーに回る心配も意味もないし、ついでに言えばそんな義理もない。

出久は受験会場がブローニヤと別ということを心底寂しがってはいたようだ……。

「ハイスタート!!」

「Сотворение創造・フックショット」

ブローニヤは重装ウサギ19cを創り出して直ぐにその重砲に触れて改造を施した。

19cの重砲をフックショットに改造して自身はその機械の腕に身を預けた。

「Fire!」

バシュツ!!と音がして50mほど離れたビルの屋上に極太のワイヤーが絡まる。そしてブローニヤが予め入力したコマンドに従って19cは一気にワイヤーを重砲の中に格納を始める。その作用を利用してブローニヤは他の受験生に先んじて高い場所を確保することができた。飛行系の仮想ヴィランは紹介されていなかったのですぐに襲われることはまず無いだろう。

「Манюアル重装ウサギ19c、オートマチック手動制御から自動制御に移行。『ストライカー』装備後、敵影補足次第殲滅してください」

「了解Да」

『ストライカー』を創造し、19cを自身の制御下から切り離して独立行動をさせつつブローニヤは次の準備に移った。

「Сотворение創造・雪娘」

ブローニヤは自身の身の丈の2.5倍はあろうかという雪原のよくな色をした狙撃銃を創り出した。

これはブローニヤが射撃の訓練をしていた時にオールマイトがわざわざ呼んでくれたヒーローに一時貸してもらった銃だ。

(そういえば彼女のヒーロー名はなんだったんでしょうか。ホワイトフェザー? いや、それは片割れの方でした。ホワイトトリッパーだっ

たかムー○ンだったか……)

およそ試験中に考えるべきでないことを頭に浮かべながらブローニャは雪娘にこれまた白色のローラー付きバイポッドを取り付けて銃弾を装填。適当に目星をつけた場所で照準器を覗き込んだ。

そのスコープの中心に仮想ヴィランが入った瞬間、ブローニャは迷わず引き金を鳴らしてドタマを爆裂四散させる。思考回路を失った仮想ヴィランはゆっくりとその場に倒れ伏した。

「……一応練習はしていましたが、鈍ってないようでよかったですね」ブローニャはスコープから目を外して安心したようにため息をつくくと、また一息吸って次なるポイントを見据えた。

同じポイントで襲われることなく淡々と銃を撃ち続けていると自分でセットしたタイマーが試験時間残り二分であることを教えてくれる。

既に合格圏内レベルにまでポイントはある。次いでに別の加点ポイント用に幾らか仮想ヴィラン撃破以外の行動もしておいた。だがそろそろ『アレ』が現れてもいいころではないだろうか。

そんなことを考えたせいなのか、明るかったはずのブローニャの真上に影が差す。

雨でも降るのでしようか？と空を見上げるとそこには説明会場で紹介されたOPヴィランが無機質な赤い瞳でブローニャを見つめていた。

「手動制御ッ！ Мануальное 創造・フックショット！」

すぐさま19cの制御権を回復させて指示を飛ばす。存外OPの動きはゆっくりなようで急いだ割には余裕を持って退散出来た。しかしその巨大な鉄腕による攻撃は先程までブローニャがいたビルを倒壊させるのには十分すぎるものだった。もしかしたら瓦礫に埋もれて圧殺されていたかもしれない。

「……ブローニャの全力を試すいい機会です。胸を借りるつもりでやってみましょう」

ブローニャはフックショットで四棟ほど先のビルに到着すると0

Pに向き直り重砲を構えた。

「Сотворение 創造・ヘカトンケイル」

重砲が先程のフックショットやストライカーと違ってみるみるうちに歪な形状を成してゆく。19cの腕のみならず背中にもまで重砲から伸びた配線やチューブが接続された。

オーバードウエポン・ヘカトンケイル。それは現在の19cが使用すれば反動に耐えきれず自壊してしまうレベルの武装だ。しかし今のブローニャは特別追い詰められている状況でもないし、どちらかと言えば有利なのはこちらの方である。使えば19cを再び呼び出すまでに多少の冷却時間クールタイムを要するが、ここまでポイントを稼いだならば大丈夫だろう。

「目標補足……ええーい!!」

ボゴオ!! と派手な音をたてながらその砲弾は発射された。鈍色に光る鉄玉は寸分の狂いもなくOPの赤い視覚カメラに吸い込まれていき……

b o m m m m m m m m m m b
!!!!!!

『終了〜!!』

OPはけたましい軋みを上げながらその場に倒れ伏す。ブローニャの入学試験は無事終了した。

テリテリ〜♪成績発表〜♪

「成績発表だよブローニャ少女!」

「……なるほど。他の生徒たちはこのセットで録画したデータを配るんですね」

成績発表の日、ブローニャとオールマイトは無駄に豪華なセットの壇上で向かい合っていた。オールマイトはトゥルーフォームではなく対外向けのマッスルフォームである。

最近はいらんがいたとしても他のヒーローにまかせているのでちよつとだけ活動時間が上がったとか、上がっていないとか。

「ま、私が雄英で教鞭を執ることは世間一般には知られていないからね。サプライズも兼ねてつてことさ! さて、前置きはここまでにしようかブローニャ少女! 君の結果は〜」

オールマイトはどこから取り出したのか、いきなりドラムロールを叩き始めた。無駄にテンポが早い上に結構長い。その割には叩き方が様になっているのは入試の後ブローニャに音ゲーに付き合わされたからである。その後味を占めたのか彼の私室に小さめの電子ドラムが設置されていたとか。

「ジャカジャン! おめでどう、合格だよ! と言っても君にとってはさほど驚くべきことでもないのかな?」

「まあそうです。一応ポイントは重装ウサギ19cの分だけですが計測はしていましたし、それだけでも十分合格圏内なのは分かっています。それと仮想いらん撃破だけが今回の合否を分かっわけではありませんよね?」

「その通りだよブローニャ少女! ……あれ? 私がうつかり君に試験内容洩らしたりはしてないよね?」

「そこは大丈夫ですから安心してください」

ブローニャはオールマイトに過去にどんな試験内容があったのかを聞いたことがあったが彼が見せたのは過去の試験内容だけで今年度のものはさすがに見せてはこなかった。

それからブローニャは過去十数年にわたる実技試験内容を洗い出

して選別し、今回の試験で出題されそうなものをピックアップしておいたのだ。

更にピックアップしたものの中からいくつかのシークレット加点ポイントを見出していた。

「それで私は何位なんでしょうか？」

「んん、っ……まあそこは気になるか。えーと筆記試験は受験者の中では2位、そして実技試験は堂々たる1位だね！」

筆記試験は五教科＋αで587点、そして実技試験はヴィランポイント64点とレスキューポイント47点で合計111点。総合成績は紛れもない首席合格だ。

ここでオールマイトはカンペをポケットに突っ込んでわざとらしく一つ咳払いをした。

「さあ来いよ、ブローニャ少女！ここが君のヒーローアカデミアだ!!」

「……他の合格者の撮影をする時はカンペ見ないようにしてください。何故か私が恥ずかしいです」

「辛辣ウー！」

オールマイトはまだ他の生徒の分の撮影があるそうなのでブローニャは先に帰宅することにした。

撮影会場から退室して少し前に自作したスマホのマップを開く。この雄英の校舎は中々に広い。一日で全てを回ることが不可能なレベルで広い。

国が本気で作った学業のアミューズメントパークのようなものだから当然と言えば当然なのだ。

てくてくと歩くこと十数分。ブローニャはあることに気を取られていた。

(後ろに誰かいますね)

さすがにこれだけの時間後ろからコツコツと反響する音がすれば嫌でも分かる。しかしブローニャは自分がストーリーカーされる理由を全く分からないでいた。

もしオールマイトの自宅を知りたいマスコミだった場合、彼にとん

でもない迷惑がかかってしまうだろう。マスクミでなかったとしてもここまで後ろを取られているのは何か気持ち悪い。

「重装ウサギ19c、fire」

歩きながらごく自然に19cを創造してノールックで後ろに弾を放つ。今回射出したのは着弾した対象にトリモチのようなものを付着させるものだ。非殺傷兵装の上に低コストなのでブローニャはとても重宝している。

「わぶっ！ ふあみよふおれ何よコレ!!?」

「あなたが後ろからついてきていたことは分かっています。何が目的ですか？それともただのストーカーですか？」

トリモチが着弾した方向を見やればモゾモゾと動く何かの一つ。恐らく自分よりも2cmほど小さい身長のは懸命に身体を動かすが、全身を覆うトリモチには敵わないだろうとブローニャは思っていた。

「セイっ！」

黄金色に輝く巨大な十字架が目の前に突き刺さるまでは。

ガチャリとその形状に似合わぬ機械音を鳴らした十字架の中から本体と同じ色をした大量の鎖が飛び出してトリモチを覆っていく。

「粘着力を『制約』するなんて初めてね。というか声かけようと思っついていってただけだし！ヒドイじゃない！」

粘着力の無くなったトリモチがその華奢な腕によって廊下の隅っこに放り投げられる。

ソレは人だった。シスターのようなデザイン服をまとったブローニャよりも少しだけ小さな少女だった。……見た目は。

「子ども……?」

「違うわよ！少なくともオールマイトよりは歳上よ！」

「!?」
少しだけ瞳孔を大きくしたブローニャに得意そうにしながら彼女は高らかに名乗りを上げた。

「あたくしはテレサ。テレサ・アポカリプス。今年から雄英の教師になるのよ！ よろしくね、ブローニャ！」

Bronya File. 2 『ゲーム』

File. 1から数ヶ月後の話である。デトラネットとFGIで稼いだ資金でそれ以外のヒーローサポート会社の株も買い始め、女子中学生としては破格のお小遣いをGETしたブローニャ。

そんな彼女が貯めたお金はPC機材の他にどこに使われているのかというところ——

「格ゲーでも脳筋ですか……それはそれで大したものですが」

カチャカチャとブローニャのコントローラーが音を鳴らす。対してオールマイトはがむしやらに攻撃ボタンを連打するだけだった。VSヴィランならばそれが彼の最適解なのだろうが。

「平和の象徴がこんなところで終われるかアツ!!」

しかし彼の奮戦虚しくキーン!と子気味のいい音と共にオールマイトが操作していたキャラに赤黒いイナズマのエフェクトが走る。所謂「致命エフェクト」というものだ。

『Bronya WIN!』

「最初は回避に出の早い小攻撃と通常必殺技を織り交ぜていたのだから中々突破口を作れませんでしたが追いつめられるとダメですね」

「くう……やっぱり練度が違うなあ」

「まぐれでもオールマイトに負けたらブローニャは落ち込んでしまいます」

——彼女の大好きなゲームに注ぎ込まれていた。

オールマイトはブローニャの養父という立場もあり、原作よりも

ヴィラン相手に出撃する回数が少なめになっている。というか意図的に塚内警部や根津校長がオールマイトへの出撃要請を減らすように根回ししているのだがそれはまた別のお話。そしてその時間はブローニャとの遊びと指導に使われているのだ。

ちなみに総合勝率はもちろんブローニャの方が高いが、音ゲーとパズルゲーの勝率はオールマイトの方が上だったりする。

「じゃあオールマイト、行きましようか」

「もうかい？ おじさんちよつとだけ目が疲れて……」

「じゃあブローニャのアイマスク貸すのでさっさと治して下さい。では20分後に」

リビングから軽い足取りで出ていくブローニャを見送ったオールマイトは先ほど渡されたアイマスクに目を落とした。

少し前から何か勝負をする時は軽めの賭け事をするようになったのだ。

今回はオールマイトが負けたのでブローニャの買い物に付き合うことになっている。行先は多分ホームのアンテナショップだろう。

負けるのは悔しい。しかしブローニャの仕草が軟化している様子を見るのは楽しい。

これが子どもを持つ幸せということなのだろうか。人々の心の拠り所になると決めたあの日から、自らは人並みの幸せを手にすることはないと思っていたオールマイトだったが――

「まったく、素直じゃないんだから……」

――その顔にはいつもの張り付けたようなものでは無い、八木俊典その人としての笑顔があった。

Q. 初日から除籍宣言があるって本当ですか？

「忘れ物はないかな？」

「昨日確認したので大丈夫です。もし忘れたとしてもオールマイト
持ってきてくれるはずなので」

「それは私が信用してもらっていると受け取っていいのかな？」

「ご想像にお任せします」

オールマイト宅、玄関前。ブローニャは雄英高校指定のブレザーに
袖を通してリュックを背負った。

「行ってきます」

「ああ、行ってらっしゃい」

「あつ、ブローニャ」

バスから降りて雄英高校正門前にたどり着くとブローニャの元へ
走り寄ってくる人影が一つ。

「おはようございます、テレサ先生」

「うん、おはよう！」

シスター服に身を包んだテレサが朗らかな顔をしてブローニャを
出迎えてくれた。どうやらブローニャのクラスの副担任を担当する
らしく、ならばついでにとブローニャを案内しに来たらしい。

「別に一人でも行けますが？」

「いいのよ。あたくしがやりたくてやってることなんだから」

行くわよ！と返事も待たずにテレサは先へと進んでいく。

頭ごなしに案内を断る理由も見つからなかったのでブローニャは
大人しくついて行くことにした。

「ここまで大きくなってもいいと思うんだけどね」

「………それには同意します」

教室の扉の前に立つ二人。その中からは言い争うような声が聞こ

えてくる。

テレサは扉と自分の身長の違いに少しだけむくれながらもガラリと扉を開けた。

「聡明イ？ クソエリートじゃねーか、ぶっ殺しがいいありそうだなあ！」

「なっ!? 君は本当にヒーロー志望か!? 人を助けるものとしての言葉とは思えないぞー！」

「ケツ……」

「はいはい喧嘩しないの！ 君はとりあえず机から足を下ろしなさい！」

テレサの雄英での初めてのお仕事はこの言い争いを収めることのようにだ。

ブローニヤは勝己に見つかりと因縁をつけられるだろうと思ったのでぴしゃりと扉を閉めて逆の方から自分の席へ行くことにした。

「あ、ブローニヤさん！」

「受かったとは聞いていましたが少しだけ心配していました。おはようございます、出久。ところでそちらの方は……」

振り返ればそこには見事雄英に合格した出久の姿があった。

ブローニヤは彼が試験中に自分のキャパを超過した一撃を放ったことで大怪我したと聞き一応生存確認の電話はしておいたのだが、無事な姿をこの目で確認するのは今日が初めてである。

「試験の時以来だね。私麗日お茶子！ よろしくね！」

「お茶子ですね。ブローニヤ・ザイチクです。よろしく」

「ええと、ブローニヤちゃん？ いいんだよね」

「ええ、ブローニヤで構いません。あっちの扉は少々騒がしいのでこちらから行きましょう」

軽く自己紹介を済ませた3人はブローニヤの言う通りにテレサとは別な方から入った。

ブローニヤはチラリとテレサの方を見ると――

「誓約の十字架の出番のようね……！」

勝己が大量の鎖で天井に釣りあげられていた。鎖の発射元は彼女の目の前にある金色の十字架だ。テレサの性格はまだ関わりの浅いブローニヤが深く知るところではないが、身長が小さいことを気にしている節があったので、十中八九勝己がそのところを馬鹿にしてみただのだろうとブローニヤは結論付けた。実際のところそれは正解である。

「誓約ヒーローTeririがどうして雄英に!!?」

「先生は『あたくし日本ではあまり知られていないのよね』と仰ってましたが知ってる人もいるのですね」

「もちろん！日本じゃあまり活動していないヒーローだから認知度が低いのも無理はないけど世界規模で見ればTeririは色んな国や地域で活躍しているグローバルなヒーローだからね。各国滞在中に彼女が捕縛したヴィラン件数は中々の数だし、何よりTeririの個性である『誓約の十字架』はあやまってヴィランを捕縛するのにうってつけな個性で——先生?……先生!!?」

「ついさつき聞いたばかりですが、確かこのクラスの副担任だったはずです。……よいしょつと」

副担任!?!と驚き、では担任は誰だろうと一人思案に耽る出久を尻目にブローニヤはさっさと自分の席に座った。よかった、後ろの方であるようだ。

お茶子は思考の海に沈む出久を引っ張りあげようとしている。健全なことである。その後見事浮上に成功した出久はお茶子との距離の近さにアワアワとしていた。ブローニヤはそれを瞳に映して、短くため息をついた。

そういえばこのクラスの大半も幼女(らしき見た目の)テレサの行動に対してアワアワしている。ブローニヤは特にその事には関心はないように素直に担任が来るのを待ち続けた。

「テレサさん、その辺にしておきましよう」

フツと鎖や十字架が消えて勝己の自由落下が始まる。いつの間にか真下にいたくたびれた姿の男性が勝己をお姫様抱っこで受け止めた。クラスが少しどよめくいたり黄色い声が聞こえたが彼は意に介さず勝己をゆっくりと地面に下ろした。

「ちよつと消太、まだあたくしのお叱りは終わってないわよ！ ガキシスターだのチビセイントだの好き放題に言ってくれちゃって！」
「お叱りも結構ですがそろそろ始業の時間です。個別指導の時間は後からたつぷりとれますから今は収めて下さい」

それを聞いたテレサにじろりと見られた勝己は渋い顔をしながらつつけんどんな態度で席に着いた。

「担任の相澤消太だ、よろしく。入学して早々だが君たちにはこれから個性把握テストを受けてもらう。廊下の段ボールの中から体操服とってグラウンドに出ろ」

そう言うのと相澤はスタスタとウイダーをくわえて出て行ってしまった。

「あたくしは副担任を務めるテレサ・アポカリプスよ！ さっきの彼、見込み無しと判断したら即座に切り捨てるタイプだから早めに準備した方がいいかもね」

じゃね〜、とテレサもトテトテと出て行った。すると生徒は我先にと廊下に飛び出し体操服を引っ掴んで近くの更衣室へ走っていく。

ちなみにブローニャはテレサが出てから一足先に更衣室へ向かった。先ほど出久がテレサについての話をしている時に既にそれを取り出していたからだ。

三分という中々の高タイムで全員グラウンドに整列した。ちなみに相澤は先ほどのまんまの格好で、テレサは何故か生徒と同じ体操服に着替えていた。

「入学式は!?! ガイダンスは!?!」

誰かが叫んだ。その発言は至極真つ当なものであるが相澤はそれを切つて捨てるようにアンサーを口にする。

「合理性に欠けるので全カットだ。意見は求めん。うち雄英は自由を売り教師陣にしているがそれは『こちら側』も同じ事。というわけでさつさと始めていくぞ。爆豪、中学の時のソフトボール投げ何m?」

「67m」

「じゃ、個性使つて投げてみる。その円から出なきゃ何してもいい」それを聞いた勝己はニヤリと笑みを浮かべて渡されたボールを放りながら円の中へ足を踏み入れた。

ボールをググツと握つてお手本のような投球ホームに入る。あんな性格なのになかなかどうして綺麗フォームなのは彼が才能マンである所以なのだろう。

「死ねえ!!!」

その口から出た言葉には綺麗さの欠片もなかったが。掌から起こつた爆発の風はボールをぐんぐん遠くまで飛ばしている。

ピピツと相澤の手に持った端末が音を鳴らす。『705.2m』と表示された結果に一同は沸いた。

「なんだこれすげー面白そうじゃん!」

「705mってマジ? そんなん出せるかなあ」

「流石ヒーロー科! 個性思いつきり使つていいんだ!」

喜ぶ彼らの声を聞いたテレサはあちゃー、と申し訳なさそうに頭をかいた。彼女は知っている。相澤がこれから何を言わんとしているかを。

そんな彼女の様子になったブローニヤは皆とは少し離れた位置にいた彼女に声をかけた。

「テレサ先生?」

「何? ブローニヤ」

「いえ、名状しがたき表情をなさっていたので」

「名状しがたき表情って何!?! いやそれはともかく……ま、見てれば分かるわよ」

「そですか、と素っ気なく頷いたブローニヤは言われた通りに相澤に目を向ける。

「面白そう、か。お前たちはヒーローになるための貴重な三年間をそんな腹積もりで過ごす気か?」

「そうだな、トータル成績最下位の者は見込み無しと判断することでしょう。ま、要は除籍処分な」

「二「はあああああ!!」?」

「……ね?」

「いいのですか?」

「中途半端な覚悟でヒーローになられても困るもの。ま、これもヒーローになるための試練だと思って頑張ってちょうだいね。Plus

Ultraよ〜!」

テレサはヒラヒラと手を振ってブローニヤに踵を返し、近くの倉庫のような場所にばたばたと走っていった。

まあその通りではありますね、とブローニヤは彼女の後ろ姿を見ながら頷き悲観にくれる真つ最中のA組の元へ走っていった。

本来ならば50m走が第一種目だが副担任を有効活用しない手はないという相澤の思惑により出席番号の上半分と下半分で同時並行でテストをすることとなった。

テレサの今日の職務は相澤を見て雄英の方針を学ぶことが本来の目的なのだが、意外にも乗り気である。久々に教師らしいことが出来るのが嬉しいようだ。

第一種目：長座体前屈

「重装ウサギ19c」

突如として出現した異形の物体にテレサ組一同は騒然とするがブローニヤは気にすることなく淡々とこなした。元々身体は柔らかい方なのか、19cを使わなくとも意外と好成績であった。

記録：661.5cm

第二種目：上体起こし

「特に活かせることはなさそうですね」

記録：25回

第三種目：ボール投げ

「なあなあ、それって何なんだ？」

心底不思議そうな表情をした赤髪の青年がブローニヤに話しかけた。彼は重装ウサギ19cのボディをコンコンと手の甲で叩く。それに対して短い駆動音で反応する19cに驚いていた。

「これは重装ウサギ19c。私の個性で創った自立兵器です」

「へ、兵器かあゝすつげえな！ 俺、切島鋭児郎ってんだ。よろしくな！」

「ブローニヤ・ザイチクです。よろしく」

ブローニヤは円の中に入り19cの重砲の中にコロコンとボールを投げ入れた。既に弾は装填済みなので後はBOM！ と放つだけ。

「FIRE！」

腹に響くような鈍い音が響き弾と共にボールが射出される。しかしブローニヤの予想よりもあまり飛距離は伸びなかった。

「記録は557.6ね。一応異形型個性用のバスケットボールくらいの計測ボールもあるけど試す？ ちなみに重さは同じよ」

「お願いします」

今度は計測ボールを弾として射出した。多少重砲に無理をさせたがそれは致し方ないことだ。

記録：1635m

第四種目：反復横跳び

種目数が奇数のためにここでテレサ組と相澤組が重なってしまつた。ここでどっちが先にやるかとわちゃわちゃしても仕方ないので普通に出席番号順でやることとした。

「では力道さん、計測よろしくお願いします」

「任せとけブローニャー！」

19cに自分を持たせてフィンフィンと音を出しながら高速移動した。

記録：78回

第五種目：立ち幅跳び

(出久が最下位になることはなさそうですね……)

出久はブローニャの介入により原作と違って全力と比べ3%ほどのパワーしか発揮できないが、身体をぶち壊すことなしでOFAを使いこなせるようになっていた。要はフルカウル(弱)である。しかし調整を少しでもしくじれば複雑骨折の運命が待っているので気を抜くことは出来ない。

勝己にガンを飛ばされながらも彼に迫る飛距離のボールを投げる出久を見てブローニャは少しほっとした。

「ブローニャ、いつまで浮いてられる？」

相澤組の様子をブローニャは重装ウサギ19cの腕に身を預けながら見ていた。もちろん19cはふわふわと宙に浮かんでいる。

「重装ウサギ19cのエネルギーが切れるまでですが、ブローニャの精神力が続く限り創り続けられるので……一日弱くらいなら。試算しますか？」

「いや、大丈夫よ。もう降りていいわ」

テレサは手に持った端末に何かを入力して次を促した。

記録：∞

第六種目：握力

「重装ウサギ19c！」

メキヨ！ と音が鳴って握力計の針が時計のように一周した。異形型個性用で再度試して事なきを得た。

記録：2. 43 t

第七種目：50 m 走

ブローニャはこれも反復横跳びと同じ要領で行った。

記録：5. 12 秒

「それじゃあパッと結果発表だ」

A組が全員集合している前で相澤は手持ちの端末を操作して順位のホログラムを表示させる。

ブドウ頭が絶望的な表情をしているので恐らくは彼が最下位なのだろう。

「ちなみにだが、除籍はウソだ」

相澤はホログラムを消して端末をポケットにしまった。生徒たちの喧騒は思わず効果音を付けたくなるような静けさへ変わった。

「君らの最大限を引き出すための合理的虚偽」

彼は人の悪い笑みを浮かべながらそう言った。

その後生徒たちの阿鼻叫喚が響いたのは言うまでもないことである。

Bronya File Special 『ホム
シヨップ』／ 闇の胎動

「ホムシヨップに行くわよ！」

「先生に誘われておいてアレですが、他の仕事は——」

「あたくしは新任だから本格的なのは明日からよ！」

個性把握テストが終えた日の放課後、ブローニヤとテレサは校門前で待ち合わせをしていた。

テレサはテストの時に着ていた体操服から既にラフな格好——と言っても少々ゴスロリチックなので傍から見ればソレはラフとは言い難いのだが——に着替えており、準備万端のようだ。ちなみにブローニヤはこれといった着替えを持ってきていないので制服のままである。

「ここからホムシヨップまでは結構な距離があつたと思うのですが何で行くんですか？」

説明しよう!!

ホムシヨップとは大人気キャラクターの『ホム』のグッズの専門の全国にそこそこの数を展開しているお店のことだ！

オラよくわかんねっぞ！ という方は夢の国ストアみたいなものだと考えてもらっていいぞ！

更に説明しよう!!

『ホム』とは崩壊3rd内に登場する布袋の結び目みたいな耳がトレードマークのゆるふわなキャラクターである！

そのキュートなフォルムのどこにそんな発声器官が存在するのか疑問が尽きないが、無駄に渋くてイイ声をしているぞ！

「もちろんハイペリオン崩壊3rd内ではプレイヤーが艦長を務める戦艦のことだが、このSSではヒーロー事務所『天命』及び『ネゲントロピー』が共同使用する汎用航空艦兼事務所である。現在は雄英高校の空き地に着陸している。設計にはネゲントロピーの技術者の面々とオットーが関わったせいでロマン溢れるマシンとなつてしまった。！……と言いたいところだけどさすがに私用で使ったら母様に怒られちゃうわ。あたくしたちの家みたいな場所だしね」
だから今回は私の自家用車よ！ とテレサはニカリと笑った。

？

「なかなかのドライビングテクニク……」

「そう？ ちよつと前までペーパードライバーだったから心配だったけど問題なさそうね」

テレサとブローニャは車を降りて目の前にあるホームショップに入店する。

いらつしやいませ、とホームがプリントされたエプロンとキャップを身につけた店員が笑顔で会釈した。

入口近くのショーウィンドウには春季限定の桜ホームグッズとタイアップ商品の『ホームと桜』が展示してある。お値段はかなりの高額だがこの二人に買えない額ではない。

「あたくしは漫画コーナーに行ってくるけどブローニャはどうする？」

「私は春季限定商品を見っていきます。あの辺で落ち合いませんか？」
「了解！」

通常のマグカップや生活雑貨などが置いてあるコーナーに集まることにした彼女らは思い思いの場所に移動して商品を吟味し始める。

「とりあえずタイアップホムカップ（春季）は揃えておきましょうか」
うさ耳和装桃髪の少女とホムがプリントされたマグカップをカゴ
に入れたブローニャは次の物品に目を通す。

期間限定商品は次の季節が来る頃にはまた別のデザインに変わっ
ていることが多い。タイアップ商品も同様にコロコロと柄を変えた
リイラストレーターが変わったりする。

季節限定タイアップ商品なんてものは余程の好評でなければ次の
季節に同じ物が回ってくる保証はない。なのでブローニャはその
ところを了解した上で季節限定コーナーに入り浸っているのだ。

今回ホムとタイアップしたのは実在のヒーローである『八重桜』だ。
彼女はとあるヒーロー事務所に所属するヒーローで日本の美容系の
CMなどにも度々出演するで認知度は割と高い。

最近は朝ドラ時代劇のヒロイン役を演じたりと女優としての活動
が多いが、ヒーローとしての彼女は一時はヒーロービルボードチャ
ートJP十位前半に到達するほどの実力者である。

？

「随分買いましたね」

「えへへ、小説版も発売してたから大人買いすることにしたの！」

二人は購入量で周りからの注目を集めながら会計を終えた。では
車に戻ろうか、というところでブローニャは窓の外に到底信じ難いも
のを目にする。

（黄色のボディ、巾着の結び目のような耳、光に照らされて輝く白い
歯、くりくりとした目。そして何よりその凛々しくも渋い声……！）

「ホムア——ッ!!?」

テレサが彼女の不在に気がついた時には既にブローニヤはホムにすごい勢いで抱きついていた。もはやタツクルと言っているレベルの組み付きである。

「ホム、ホムです……本物の……!」

「い、痛いホム……ゴフツ」

その華奢な身体はどこからそんな力が出てくるのか、万力のように胸を締め付けられたホムは無表情ながら恍惚そうな声色で自分の名を呟く銀髪少女とその少女を引き剥がそうとするゴスロリ幼女の姿を最後に意識を手放した。

?

「ホントに申し訳ございませんでした! あたくしの監督不行き届きでホムさんにご迷惑をかけてしまって……」

「反省したならいいホム。ホムも大事にするのは望まないホムし、こんなにもホムを愛してくれている人を邪険に扱うのはそれこそホムの沽券に関わるホム」

ホムシヨップ内にあるこじんまりとした応接室でテレサとブローニヤはホムと対面していた。

ホムがフアンの手によって意識を手放すことはままあることらしく彼も「これもホムが愛される所以ホム」と鷹揚に語っていた。いいのかそれで。

ちなみにブローニヤはホムを後ろから抱きしめながら微笑を浮かべていた。傍から見れば人形を抱いた制服の女の子である。ただしその人形はナマノモなのだが。

「見たところ雄英の生徒さんと……もしかしてヒーローホム?」

「よく分かりましたね。あたくしはヒーロー事務所『天命』所属の誓約

ヒーローTeriri、テレサ・アポカリプスです」

「これはこれは名刺をどうもホム。ホムは株式会社H×H（ホム×ホム）カンパニー社長補佐のホムだホム。これでも人間観察には自信があるホムよー」

「雄英高校1-Aのブローニャ・ザイチクです」

「これはどうもホム。名刺い「いります！ 欲しいです」

「……即答ホムね」

食い気味に答えたブローニャに若干驚いたホムだったがすぐに持ち直し彼女たちとの他愛のない会話に興じることとなった。

？

薄暗い部屋の中、人影が電子機器の前で忙しなく手を動かしている。その口や首元には様々なチューブが繋がれており、人目で随分な重傷を負った人間なのだと理解できるだろう。

しかし果たしてソレは本当にヒトと呼べるべきものなのだろうか。ヒトとして大切なものなど、この怪物は遠い昔に置き去っているのではなからうか。

怪物は背後に感じた自らと同じく人ならざる気配にゆっくりと振り返った。

モニターの光に照らされた長い白髪はその光を反射させ彼女の姿をぼんやりと映し出す。

背中には奇怪な形の三槍の鉾に、橙々に輝く羽の白い三翼。

真っ直ぐに怪物を見据えるその目は爛々と淡い光を放つ。

膝にまで届こうかという長さの白髪をかきあげて、気だるそうに目の前の怪物に尋ねた。

「急に呼び出したかと思えば、よもやこんな窮屈なところだとはな」

「ここは君を出迎えるには役不足だったかな？」

「当たり前だ。が、お前のその状態を見るに致し方ない部分もあるようだし、大目に見てやらんでもないさ」

白髪の少女はおもむろに怪物に近づいて、つうつと首元のチューブをなぞった。微笑を浮かべる彼女に少しでも不機嫌そうにしながら怪物はカチツとボタンを押す仕草をした。

「今すぐ君の心臓を破裂させても構わないんだがね」

「……お前を害した記憶はないが」

「白々しい。僕が手綱を握っていないきや三秒前くらいにはしでかしていたじゃないか」

鳩が豆鉄砲を食らったような顔をした後、彼女はそのあどけない顔に似合わない笑い声をあげた。

「また新しい力でも仕入れたのか？」

「まさか！ ただの当てずっぽうだよ。……茶番はここまでにしようか。君を呼んだのはちよつと頼み事をしようと思ってるね」

「頼み……既にアレは定期的にハゲの元へ送っていると思うが？」

「アレとは別だ。多分今年度中に僕は平和の象徴と衝突することになると思う」

「ほお。それで？」

「もし、万が一だけど僕が負けた時の弔の後見人、及び彼への協力をお願いしたい」

彼女が何かを発する前にその怪物、ALL FOR ONEは畳み掛けるように言葉を重ねた。

「やってくれるかい？ シーリン——いや、今はキアナと言った方が

いいかな？」

シーリンと呼ばれた少女は内心舌打ちした。丁寧に頼み込んでい
るように聞こえるが、実際のところ彼の言うことに彼女は逆らえな
かった。

弱み（物理）を握られているからだ。

「……私に拒否権はないんでしょうね」

「あるけど実質無いようなものだからな」

ため息一つ、少女は分かったわよと返事をして踵を返した。

「弔……だっけ。そいつのそこには今すぐ行かなくてもいいんで
しょ」

「もちろん。その時が来るまで静かにしてくれていれば尚良しだ。
ちゃんと約束を守ってくれたら褒めてあげよう」

「御生憎様、私はもうガキじゃないわ」

その台詞を最後に少女はその部屋の中から掻き消えるように消失
した。

「ふふふ、つれないねえ」

暗闇に一人残された怪物は嗤う。

彼は知っている。あんなつつけんどんな態度の彼女だが、律儀に自
分の約束は守ってくれることを。

幼少の頃からじつくりと施したチューニングはようやく功を奏す
るレベルにまで達したらしい。

もう少しだ、後もう少し。

——USJ襲撃事件まで後約一ヶ月

戦闘訓練①

「わーたーしがー普通にドアから来た！」

個性把握テストを終えた次の次の日の7時限目はヒーロー基礎学の時間だ。

今回の授業の指導を担当するのは我らがナチュラルボーンヒーロー・オールマイイトだ！

「銀時代のコスチュームだ！」

「さすがオールマイイト！俺たちにはなれない画風で登場してのけるッ!!」

「そこにシビれるあこがれるウー！」

浮き足立つ生徒たちをオールマイイトは手で制し、懐にあったリモコンのボタンを押した。

「今日はみんなに屋内戦闘訓練をやらしてもらおうぞ！ つきましては君たちが入学時に出したコスチューム案をサポート会社の皆様に形にしてもらった！」

バシユ！ と空気が抜ける音がして教室後方の壁がせり出す。

各生徒の番号が割り振られた近未来的なデザインのロッカーが顕となった。

「形から入るってのもヒーローになるための第一歩ってやつだ。では着替えたら市街地演習場に集合っ！」

？

今回行われる訓練は屋内戦闘訓練です。

オールマイト曰く「真に賢しいヴィランは屋内やみに潜む」とのことなので最初の訓練としては妥当なものだと思います。

部屋で何度も訓練の説明の練習をする彼を見て少しだけ不安だったのですが、カンペも読まずにきちんと説明できていました。私も手伝って正解でしたね。

ルールはこうです。2人1組のチームを作ってヴィラン役とヒーロー役に別れます。ヴィラン側の勝利条件は屋内に隠し持った核兵器を制限時間まで守りきるかヒーローを捕まえること、そしてヒーロー側の勝利条件は核兵器を回収するかヴィランを捕まえることです。

——そろそろヒーローチームの出久&お茶子VSヴィランチームの勝己&天哉の試合が始まります。出久と勝己には浅からぬ因縁があるようですが……訓練に影響しないことを祈りましょうか。

？

バツチリ影響してました。特に勝己、私怨丸出しです。まさか読みが外れてしまうとは……。授業中の態度はそこそこ利口な様子だったのですが、どうしてでしょう？

開始直後に勝己が出久とお茶子に強襲。出久は殿を努めてお茶子を核兵器の元へ向かわせます。

お茶子が上へと向かう中、出久は勝己とタイマン勝負を繰り広げます。

お互いの実力はほぼ拮抗です。センスの塊ともクラスメイトに評された勝己相手に出久は持ち前のヒーローオタク知識で対抗し不慣れながらも堅実に戦っていました。

しかし勝己の奇策——両の手を控えめに閉じて爆破を発動することによって生じた閃光——によって生み出されたわずかなスキに付け込まれてしまい出久は強烈なダメージを負ってしまいます。

お茶子は彼女対策として清掃された部屋で天哉の機動力に悪戦苦闘。天哉は制限時間いっぱいまで粘り通すらしく中々突破口が見つけられません。

時間も残りわずか。満身創痍の出久は勝己の追撃にカウンターを仕掛ける形で天井に向けてONE FOR ALL 100%を発動。その衝撃は出久の真上にいたお茶子のところまで到達してお茶子は自身の個性で浮かせた建物の破片を天哉に向かって打ち出し、見事核兵器を回収することに成功しました。ヒーローチームの勝利です。

しかしながらヒーローチームは両名共にリミットオーバー。お茶子は個性の反動で嘔吐、出久は上限超過で片腕を粉砕骨折に近い状態にまでボロボロにしてみました。

講評では天哉がベストに選ばれていましたが、私はヒーローチームの二人も賞賛したい。自らの身体を傷つけるようなことにも躊躇なく飛び込んでいく姿勢は紛れもなくヒーローとして必要なものではないでしょうか。

……まあ核兵器相手に大量の瓦礫をぶついたりするのはいただけませんが。先程のはあくまでも心構えの話です。もし核爆発なんて起こしたらヒーローもヴィランも周辺住民も、無事では済みませんからね。

？

「さてラッキーボールを当てたブローニャ少女にはワンマンライブならぬワンマンチームでやってもらうぞ！ その代わりヴィラン側とヒーロー側を選べるけど、どっちがいいかい？」

「……ではヒーロー側で」

「じゃあヴィラン側はもう一度どこかのチームにやってもらおうことになるぞ！ あ、緑谷少年と麗日少女のチームは別ね」

オールマイトがガサゴソとヴィラン側のクジをまさぐり勢いよく取り出す。記された文字はH——常闇踏陰&蛙吹梅雨のチームだ。

「二応確認するけど二人とも試合できるくらいの体力は残ってるかな？」

「無論」

「ケロ、私も大丈夫よ」

「よおしくし!! では双方準備を始めてくれ！」

?

「蛙吹、ザイチクの個性は分かるか？」

「梅雨ちゃんと呼んで。そうね、私はまだ彼女を測りかねてるわ。確か……重装ウサギ、だったかしら？ アレを作り出すとかそういう個性なんじゃないかしら」

「創るというなら八百万と同じタイプかもしれないが……如何せん情報が足りんな。とりあえず、最初は俺が出て判断材料を掻き集めるとしようか。後は手筈通りにいこう」

「そうね、お願いするわ。じゃあ私は核兵器のエリア辺りにいるから応援が欲しかったり、何かあったりしたら伝えてくれるかしら」
「了解だ」

ちょうど彼らが話し終えたところで訓練開始のブザーが鳴り響く。彼らは一度だけ目配せしてそれぞれの持ち場へ動いた。

?

「核が置いてある場所が分からないとなると風潰しにいくしかありませんね。ブローニャはワンマンですし……はあ」

ブローニャはチームを選ぶ権利がこちらにあつてよかつたとホツとしながらビルへ入——らず敷地内をぐるりと回り始めた。

ブローニャは建物全体の窓を検めていく。一階、二階、と順繰りと見ていく途中で5階の窓に黒い人影が見えた。恐らく踏陰だろう。換気でもしているのか、5階の窓の一つが開きっぱなしなのも発見した。ブローニャは他に空いている窓がないか確認した後、その窓枠に重装ウサギ19cから射出したワイヤーを引つ掛ける。

空いている窓はこの一つしかなかったので罨の可能性も十分に考えられる。というか人影が見えた時点で何かしらを仕掛けていることは確定だろう。しかしブローニャはその可能性に臆することなく19cの手のひらに飛び乗ってワイヤーの巻き上げを開始する。

数秒とかわらず窓枠に到達した。19cの顔だけを出して周りの状況を探らせるがセンサーに動体反応検出はなし。この階にはいないのだろうか。では先ほどの人影は……？

一度19cを消失させて屋内に入ってから再構築。割と凶体がでかいので狭いところだと苦労してしまうのだ。

少し入り組んだ五階をくまなく探したが、これといって収穫はなかった。

ブローニャは下の階へ行こうと暗い階段に足を一步踏み入れた。窓から指す光がないためブローニャの目には捉えられなかったが、いち早くその存在を確認した19cが主を守るために迎撃のワンツーパーチを放つ。くぐもったような声と共に影色の手がシュルリシュルリと四階へと下がっていく。

「チツ、そう易々とはやらせてくれないか」

「……重装ウサギがいなかったら防げなかったかもしれないね」

階段の踊り場に姿を現したのは常闇踏陰その人だった。

漆黒のローブを身にまとい、その背後には黒影ダークシャドウと呼ばれるモンスターが佇んでいた。

先ほどの攻撃は彼の個性によるものだったのだろう。黒影ダークシャドウの手には確保テープが持たされていた。

「言の葉は不要。我らはヴィラン。ザイチク、お前の敵だ」

「最初からそのつもりです。創造Сотворение」

ブローニヤの口上に少しだけソワツとした常闇だが瞬時に頭を切りかえて19cから発射された弾への迎撃にあたる。

「征け、黒影ダークシャドウッ！」

アイヨ！ という気立てのいい返事と共に重砲から吐き出された弾へその拳をぶつける。常闇は予想よりも威力の低い玉に少しだけ首を傾げていたが、数瞬後にその理由は判明した。

迎撃の衝撃で弾の外装が皮をめくるように剥がれて中の白い楕円球状の何かがあらわになる。

常闇はすぐに黒影ダークシャドウを引っ込めて階段を飛び降り四階へと避難した。

彼の視線の先には階段で果てるグチャリと糸を引いた粘つく白い物体——字面だけだと卑猥なイメージが頭に浮かんできてしまうだろうが単なる白色の鳥糞である——があつた。

彼が咄嗟の判断で黒影ダークシャドウを戻したのは正解だったらしい。常闇は額にツウと垂れる汗を拭った。あれに黒影ダークシャドウが当たっていたとしても大幅に動きが制限されていただろう。

「そもそも、簡単にはいきませぬね」

浮遊する19cに乗ってブローニヤは四階の床へと舞い降りる。

この階は柱以外の遮蔽物がなく、カーテンないしそれに準ずるもので締め切られているのか、上の階よりも闇が深い印象をブローニヤは覚えた。

「相手にとって不足なし」

「奇遇ですね。ブローニヤもそう思っています」

——今、銀狼と黒鳥の対決が幕を開ける

戦闘訓練②

闇から浮上した黒ダークシャドウの腕がブローニャに迫る。

それに対して砲撃は悪手と考えた彼女は19cの武器腕を右腕と同じ手に換装した。遠距離攻撃の術はなくなつたが黒ダークシャドウ影はレンジの長い腕によるダイレクトアタックしか仕掛けてこない。ならばわざわざ砲撃をかます必要もない。要らぬ被害が増えるだけだ。

地を這うように迫る黒腕を19cを盾にさばきつつ常闇の視界から逃げるように柱の影に身を隠した。ゆっくり動態センサーを使う暇もない程の攻撃の頻度のため息をつきながら、再び迫り来る攻撃から脱兎のごとく逃げ出す。

「逃げてばかりでは終わらんぞ?」

常闇から声が聞こえる。そんなことはブローニャも百も承知だ。柱を利用することで位置を悟らせずに攻撃を仕掛ける常闇は確実に時間切れを狙っていることだろう。

「そうですね、あなたの言う通りです。ですの——」

19cの大振り右フックで本日17回目の黒ダークシャドウ影のアタックを突き放しブローニャは近くの壁へと駆け寄ってカーテンを開け放つ。

そしてそこに窓ガラスがあることを確認した。

「ステルス!」

彼女は何かを口に出し19cの装甲に触れた。

すると触れた部分から青色の粒子のようなものが吹き出し、それが重装ウサギ19cの全身を覆う。

粒子が晴れるとそこに重装ウサギの姿は確認出来なくなっていた。

(ПРОЗРАЧНЫЙ……透明な、という意味だったか)

常闇は重度の中二病患者——というわけではないが、このようなカッコイイ響きのある言の葉には人一倍敏感である。ブローニャがこれから何をしようとしているかを幾らか検討をつけることができただのだ。

言葉の意味を理解した常闇は首元に装着していた通信機器を手早く起動しブローニャから距離をとって身を屈めた。

「ザイチクの19cが恐らく光学迷彩を起動した！ 奴の行動範囲は分からないがそつちに来るかもしれない！」

『了解よ。ブローニャちゃん？』

「今一階入口方向の窓側に——」

柱の陰からチラリとブローニャの様子を確認しようとした常闇はそこで言葉を切った。

彼の視線の先でブローニャは手に持った黒いコンバットナイフのようなもので窓ガラスに彼女が通れるくらいの正三角形の穴を開けていた。

三角形の底辺に足をかけたブローニャは背後を一瞥すると手首を回しながら敬礼の様な仕草を後ろへ送る。そして足元に向かって黒い何かを放り投げた。

「до свидания
「ごきげんよう」

トンつと底辺にのせた足を力を込め、玄関から外に出るかのような気軽さで空中へと身を投げた。

現在ブローニャがいる階層は四階、この高さから落ちれば確実にスプラッタな光景が広がってしまうだろう。

無論、彼女がただの少女であつた場合のお話だが。

「——窓を飛び出て下層に向かった。捕らえきれるかかわらん。迎撃準備を頼む！」

今彼女が投げた物体は何か、ブローニャは19cと自分で蛙吹を挟み撃ちしようとしているのか、はたまた光学迷彩を使った19cで窓に近づいた自分を捕らえようとしているのか。

それらの可能性を加味してbetterな選択をする判断力を今の常闇は持ちえていなかった。

逡巡も束の間、常闇は内心舌打ちして黒ダークシャドウ影を窓の方へと先行させた。今から階段を駆け下りたとて到底蛙吹の救援に間に合う距離ではないだろう。

光学迷彩を使用した19cが窓の近くに待機しているとも限らな

いし、窓近くに放り投げた何かも気になる。しかし彼女を確実に足止めできるとすればここしかないと彼は判断した。

ブローニヤが飛び降りた穴は黒^{ダークシャドウ}影の全てを通すことができるようなサイズではなかった。やむなく彼は黒^{ダークシャドウ}影の片腕だけを窓に通してブローニヤを捕まえようとしたが――

突如として腹に響くような重低音が轟く。その直後に黒^{ダークシャドウ}影の腕は何か縫い付けられたかのように動けなくなった。動けば動くほど粘りが強くなり黒影はその場から抜け出すことができない。常闇はその粘着質なものに心当たりがあった。

「鳥糞か……！」

？

ブローニヤは落ちていた。重装ウサギ19cに抱えられながらゆっくりとだが。

現在の重装ウサギ19cにはステルス——光学迷彩機能は搭載されていない。つまりさきほどのあの言葉はハツタリだ。

ブローニヤは常闇がロシア語やあまり知られていない言い回しをした時にピクピクと反応していることに気がついていた。

余計な情報をばらまくことによって対象の判断能力を鈍化させる手はブローニヤの常套手段だった。

「作戦、成功です」

重装ウサギ19cにはその巨体や腕の可動域の向上するために反重力発生装置がボディのいたるところに組み込まれている。

地面から近ければ近いほどそれは強く作用するが高所では落下を止めるレベルの効力は発揮出来ずないが、ブローニヤにとってはその程度で十分だった。

ちょうどほんの少し下に2階の窓が見えたところでブローニヤは重装ウサギ19cの腕から飛び出した。無様に激突する前に2階の窓をボレーキックで蹴り碎き、その勢いのまま床へと回転着地。既に

重装ウサギ19cの制御は自動制御に切り替え済みだ。オートマチック

四階と同じくここもただっ広い空間でありその真ん中には核兵器のハリボテが鎮座し、蛙吹梅雨がそれを守るように立ち塞がっていた。

「中々アグレッシブなのね。飛び降りといい、さっきのガラス破りといい」

「常在戦場……とまではいきませんがそれなりの心構えはできているつもりです。使えるものは何でも使いますので」

舌をペロリと出した蛙吹は既に臨戦態勢のようだ。対してブローニヤは重装ウサギ19cを再構築せずに右手を前へと突き出した。

「外にいる重装ウサギちゃんに使わないのかしら？」

「踏陰が脱出する可能性も40%ほどですが存在します。いわば保険のようなものです。では、そろそろ始めましょう」

——創造 Сотворение · 銀狼 Дед Мороз

ブローニヤが新たに創造したのは実技試験の時に創造したものの雪娘と似てグリップや銃身にいたるまでかが真つ白の銃だった。銃種でカテゴライズするならサブマシンガンが適当だろう。

「実弾ではありませんが……警戒することを推奨します」

新たに創造したマガジンをガチャリとセットすると同時にブローニヤは左へ駆け出した。

当然蛙吹もブローニヤを核の元へは行かせないと自慢の脚力で迫る。十分に蛙吹を引き付けたブローニヤは躊躇いなく銃のトリガーを引いた。

勢いよく吐き出された弾の雨が容赦なく蛙吹のボディにぶち当たる。

発砲音と身体にくるであろう衝撃に顔をしかめた蛙吹だったが、想像したような肉を穿つような威力ではなく、精々がエアガンレベルのものだった。

これならばいける、そう考えた彼女はブローニヤの付近にある柱に向かって跳躍する。

ブローニヤもそれに合わせて銃口を向けるが彼女の視界に映った

のは銃弾もかくやという速度でこちらに肉薄する梅雨の舌だった。

ブローニャは銃で梅雨の本体を迎撃したがエアガンレベルの弾では彼女を柱から落とすことは叶わず、身体を舌でぐるぐる巻きにされてしまった。

「ちよつとビックリしちゃったけどそれくらいじゃ私を止めることはできないわ」

「承知の上です。ですのであまり舌には当たりませんでしたよね？」

器用に壁から床へと降り立ち腰のポケットから確保テープを取り出した梅雨の頭にクエスチョンマークが浮かんだ。

彼女の言うことが本当ならブローニャに向かって舌を飛ばしていた時わざわざ舌を避け体を狙って弾を当てていたこととなる。

それには何か理由が――

「――ケロ？」

腕を動かそうとした彼女は気づいた。自分の胴体や腕、舌に霜が張っていることに。

蛙吹梅雨の個性は『蛙』。蛙っぽいことは何でもできる。それ故その弱点と呼べる性質も発現してしまう。

蛙はある一定以上の寒さになると冬眠してしまうのだ。彼女もその例には漏れない。

じわじわと襲い来る睡魔に耐えようとした蛙吹だったが、生物としての本能に抗うことは出来ずにへこたれるように倒れてしまった。すうすうと気持ちよさそうな寝息を立てている。

ブローニャは力が抜けたことにより緩まった舌の拘束から脱出。常闇が追撃してこないことを確認すると核兵器のハリボテに触れた。

『ヒーローチーム WIN!』

戦闘訓練後

冬眠態勢に入った蛙吹は轟の炎によって復活したが体調が優れないとの事で保健室へ。鳥糞の餌食となった黒影は芦戸の個性で鳥糞を溶かして事なきを得た。

準備ができたところでオールマイトが今戦についての講評を始める。

「今回のMVPはブローニャ少女だ！何でかな〜わかる人!!？」

ざわつくクラスメイトの中、一人の少年がスッと手を挙げた。常闇だ。

「俺は当事者でしたが……いいですか？」

「第三者意見は聞いていたけど敵側からの意見は聞いていなかったね！ OK！」

では、と一呼吸置いて常闇は順を追って話し始めた。

「俺達はザイチクを遮光カーテンを使ったフロアまで誘導し、そこでザイチクの能力の把握及び時間稼ぎで勝利しようと考えていた」

「俺の黒影は闇が深くなるにつれて力が増す。だが遮光カーテンのあるフロアは4階、そこまでどう誘導するか考えた結果が最初のアレだな」

最初のアレとは5階の窓を一つ開けておくことと、姿をチラ見せすることである。

常闇は個性把握テストで重装ウサギ19cは空中浮遊していたことを覚えており、ならばそれ以上の高度への浮上も可能なのではないかと考えた。窓を開けていたのはブローニャをそちらへと誘い込むためだったのだ。実際はもっと別な移動方法だったのだが。

「それがしくじった時はつ——蛙吹が防衛中に俺が5階まで核兵器を持っていく手筈だった。そして作戦は成功。強化された黒影でザイチクをタイムアップまでもっていくはずだったが……」

ブローニャはその拮抗した状況に楔を放った。

光学迷彩（ハッターリ）の使用、ダイナミック投身、投身前に仕掛けた黒い何か……。

「こちらを攪乱させる多くの不確定要素をばら撒かれたことによる思考の鈍化、判断力の低下が今回の主な敗因に繋がったと思う。自力にも結構な隔たりを感じたが」

「相手を自分のテリトリーに引き込むことができたのは素直に誇つていいと思います。それに屋内ではなく屋外だった場合はブローニヤも負けていた可能性が濃厚です。今回は高低差を活かしたので上手く事が運びましたけど」

「そういえばブローニヤ少女、窓から下の階に行く前に仕掛けたアレって結局なんだったんだい?」

「あれは動体センサーです。万が一踏陰が鳥糞をどうにかして窓をくぐり抜けようとすれば催涙ガスが噴出するように設定していました」

その言葉はクラスを静まり返らせるのに十分すぎる効果を発揮した。当のブローニヤは「皆さんどうしました?」と首を傾げていた。

?

屋内戦闘訓練が終了した後、ブローニヤはオールマイトと共に蛙吹が休養していた保健室へと足を運んだ。蛙吹は今回の講評や評価を聞くと「重装ウサギちゃんがいなかったら何とかなるかも、と思っただけだ……浅はかだったわね」とケロケロと表情を崩した。

確かに素の身体能力は蛙吹の方が数段上だ。

何せカエルの脚力に伸縮自在・縦横無尽の舌によるレンジの長い攻撃とブローニヤ単品だけでは背伸びしても届かないほどの能力を保っている。

しかし『ウラルの銀狼』時代のブローニヤは自分よりも腕っ節が強い相手と戦うことはざらであった。

自分だけで足りない力はあるの手この手を駆使して相手を自身の領域まで引きずり下ろすことでカバーする。それは彼女にとって至極当然なことである。

「ポテンシャルはブローニヤも梅雨もクラスのみんなも変わりません。一緒に頑張りましょう」

「ありがとね、ブローニヤちゃん。次こそはあなたの度肝を抜かしてみせるわ」

「ではブローニヤも抜かされないよう頑張るとしましょう」

コツンとフィストパンプを交わしてブローニヤは病室から退室した。

？

「なあ、ブローニヤってどんな個性なんだ？ 個性把握テストの時は重装……何とかを作ってたよな？」

「重装ウサギ19cです。ブローニヤの個性については知り合いにはよく聞かれるので……そうですね、ちよつと準備してもいいですか？」

屋内戦闘訓練後の放課後、ブローニヤは今回の授業の反省と自己紹介をする会のようなものに参加していた。ブローニヤもクラスメイトとの交流や彼らの個性の詳細が気になったので参加した。

音頭をとっていた切島から自分の個性について質問されたブローニヤはカバンからホムがモチーフになった機器を取り出して、机に置き起動する。

ホムの目の部分がパツと光ると机の上にバーチャルキーボードが表示された。ホムの頭のとっぺんからはパソコンのデスクトップのような画面が空中投影される。

クラスの視線が集まる中、ブローニヤは目にも止まらぬ速さでキーに指を走らせてホムの頭のとっぺんを黒板の方へ向けた。

すると『ブローニヤの個性考察 ver. 4. 7』と題されたタイトルがデカデカと表示される。

これはブローニヤが理解している範囲での自分の個性のことにつ

いて事細かに記したものだ。

オールマイトやプロヒーローと訓練する時に自分の出来ることを把握してもらうための説明用に作成したもので、ブローニャ本人は口頭で説明するよりも10倍は分かりやすいと自負しているらしい。

ブローニャは黒板の近くまで移動すると、どこからともなく取り出したメガネをかけて指示棒で黒板をカツカツと叩く。

「鋭児郎くんからの要望があつたのでブローニャの個性を説明します。よろしいでしょうか？」

特に依存はないと頷くクラス一同。

今か今かと楽しみにしている人がいたり、でも難しいんじゃないかねえの？ と訝しむ人もいれば、メモを手にとっている人もいる。

「百。よろしければ後でスマホにPDFにして送ってあげますが」「助かりますわ！」

「さて、それでは説明しましょう。質問は随時受け付けます。まずブローニャの個性は『武装』を創り出す個性です。ブローニャが創造する武装は一部を除いて全てオリジナルが存在します」

スライドが切り替わる。タイトルの次に表示されたのはデフォルメされたブローニャが重装ウサギ19cを創っている画像だった。

「百とは違うのか？ と思う人もいるでしょう。では次のスライドをご覧ください」

デフォルメ八百万が救急箱を創り出している絵とデフォルメブローニャが救急箱を創り出そうとして失敗している絵が表示される。

「ブローニャが創ることができるのはあくまでも『武装』。相手を害するものや自分の身を守るものしか創り出すことはできないわけです」「ブローニャ先生、質問よろしいでしょうか？」

八百万がピシッと手を挙げた。ブローニャが「百さん、どうぞ」と促すと起立して疑問点を述べた。

「私が何かを創造する時は対象の分子構造まで把握していることが絶対条件なのですが、ブローニャ先生はどこまでを把握すれば創造することが出来るのでしょうか？」

「いい質問です。ちょうど次のスライドで紹介する予定でした」

ブローニャはスライドを次へと進める。

どんな意図で 何を指し 何を使い どう創って どう使うか
「創造理念、基本骨子、構成材質、製作技術、行使経験これがブローニャが何かを創造するために必要な最低限の情報です」

「噛み砕いて言えば「見る」「触る」「構造を理解する」「材質を理解する」「使い方を理解する」を達成すれば創れます」

しかし、とブローニャは続ける。

「ブローニャはそこまで要領が悪くはないと自負しているのですが、完全理解に至るまでに時間がかかってしまいます。特に使い方を理解する、という点ですね。武装1つにつきだいたい二週間前後ほどでしょうか。もっと早くできればいいのですが、どうもここまでが現在のブローニャの限界のようです」

「と、まだまだ細かいところはありますが、簡易的な説明になるとこんな感じですね。ご清聴ありがとうございました。何か質問はありますか?」

「ザイチク、質問いいか」

後方の席に座っていた常闇が手を挙げた。

「……ブローニャ先生と呼んでくれたら許可しましょう」

どこか悦に浸ったようなブローニャ。そんな雰囲気は常闇は察知したが自分の内から湧き出る好奇心は抑えられなかったようだ。

「ブ、ブローニャ……先生。あなたが使っていた装備にはオリジナルがある」と最初に言ったな。だがそこそこミリタリーを嗜んだ俺が現状見たことがあるザイチクの武装は蛙吹に使ったキャリコム950と窓を斬る時に使った……恐らく高周波ブレードだろうが、まあそれだけしかない。催涙弾ポッドとかのオリジナルはどこから引っ張り出してきたのかが気になってな」

「ああ、それでしたらちよつとツテのあるサポート会社に装備の開発を手伝ってもらっています。重装ウサギ19cのデータ提供と少し経営資金を渡す代わりに色々と融通してもらっています」

『経営資金!?!』

今の話は半分本当で半分嘘だ。

クラスメイトたちに嘘をつくことを申し訳なく思いながらブロー

ニヤは続ける。

「ええ。少し株をやつて——」

「株ウ!!?」

「稼ぎ方教えてくれよ!!」

「オイラも!」

「ちよつと奢つて!」

上から順に瀬呂、上鳴、峰田、芦戸。

ブローニヤは現代版聖徳太子のような速さで各々の質問に回答していった。

?

「つ、疲れ……」

さすがに一時間強ほど一般高校生よりも私の強い彼らの質問に延々と答え続けるのはブローニヤにも堪えるものがあつた。

途中で緑谷がアームホルダーを装着して教室に戻ってきたが、麗日と何事かを話した後すぐにどこかへ行つてしまった。

ちなみに峰田はブローニヤの株の話についてご執心のようだった。ブローニヤの頭に彼が札東風呂に浸かり女を侍らせ豪遊している姿がよぎつた。

何故だろう。彼ならやりかねない気がする。そんな予感がした。

今日は予定がないとはいえ遅くなりすぎた。もうオールマイトは帰宅している頃だろうか。

帰り支度をしながら考える。

先ほどついてしまった嘘というのは武器のオリジナルの件についてだ。

確かに鳥糞弾とかストライカーとかはブローニヤがサポート会社に依頼して作成してもらつたもので、CHERYPOHKA 雪娘娘に関してはあるヒーローに貸してもらつたものだ。そして重装ウサギ19cはブ

ローニヤのオリジナルだ。

しかしその他のモノは彼女が戦場で使い続けてきたものだ。

高周波ブレードはドアも壁も、敵の首でさえ切り取れる。

キヤリコM950Aは一对多数の際によく使用した。

可能な限り反動を削ぎ落とすように魔改造を施し、それによって失った威力はスニーキングと機動力でカバーした。

現在使っている銀^{Дед Мороз}狼はそれとは別に特殊改造を施しているが、同じ形態のものを実戦で使っていたことに変わりはない。

その他にもヒーローが確実に使わないようなものがゴロゴロと個性の中に転がっている。

個性の中身を全て話すためには、まずブローニヤの過去から語らねばならない。それを彼らに話したとして、彼らは受け止めてくれるだろうか。話すことに抵抗はないがそこから生まれるであろう自分への恐怖——それがブローニヤの懸念材料だった。

また昔のように恐れられることはブローニヤにとって何より嫌悪することなのだ。

頭を振って自分にまわりついた思考を振り払い、ブローニヤはカバンを背負う。

今にも沈みそうな夕焼けに向かってブローニヤは帰路を辿った。

ヴィラン強襲①

「オールマイト……ですか？」

キャスターの質問にコテリと首を傾げたブローニャは暫し考えるように顎に手を当てた。

「世間はオールマイトを大概『ナチュラルボーンヒーロー』とか『N.O. 1ヒーロー』と形容します。ですが、新米教師としての彼の姿は中々に微笑ましいです。例えば授業中にカンペを見たり……」

正確に言うならばカンペを見かけた、が正しい。

オールマイトがカンペを用意していたのを発見したブローニャは彼がその内容を頭に叩き込むまで監視していたのだ。

一時的に寝不足気味になったオールマイトだったが、アメコミ画風による顔面の堀の深さ故に気づかれることはなかった。

後日朝のニュースとして取り上げられたオールマイトについてそこそこ饒舌に語るブローニャがネット界隈で話題になったとか、ならなかったとか。

？

「今日のヒーロー基礎学だが……」

相澤はスマホをスワイプして舌打ちを一つ。オールマイトから「私に限界ギリギリまでヒーロー活動してしまった！」といった趣旨の連絡が送られてきたからだ。

非合理の極みだな、と呆れながら電源ボタンを押してポケットの中へとそれを突っ込む。

「はいー！ 今日は何やるんすか？」

瀬呂が元気よく手を挙げた。相澤はそれに対して一枚のカードを見せて応える。記された文字列は『RESCUE』。つまるところの災害人命救助訓練だ。

「地震に火災に水難に。何でもござれのレスキュー訓練だ。場所によつては動きを阻害するだろうからコスチュームの着用は各自の判

断に任せる。じゃ、10分後にバス前に集合」

「あ、今日の担当はあたくしと相澤、そしてもう一人で担当するわよ！」

相澤がもう一度スマホを操作すると圧縮された空気が開放された音がして壁が迫り出してくる。最早彼らにはお馴染みの風景となったクラスのコスチューム収納庫だ。

各々準備を始める中、ブローニャは自分のコスチュームケースの中身を検めると満足そうに頷いた。自分の要望通りに大幅なデザインの変更と改良をしてくれたようだ。

ケース内に添えられた手紙には要約すると「前のデザインも捨て難いんですけど」的な文書が達筆な文字で記されていた。すみません、ちよつとアレだと動きずらいので、と心の中で言い訳をしながらブローニャは手紙をカバンのファイルの中へと放り込んだ。

「あ、ブローニャちゃん！ それ新しいコスチューム？」

隣でコスチュームケースを取り出していた芦戸がブローニャのケースをヒョイと覗いた。

「ええ、前回のコスチューム(次元限界突破)はちよつと行動が阻害されたりしたので。特に腕の袖口辺りが」

「あー、確かにみゅーんって広がってたよね」

「細かい作業をするには不適切な服装でした。色々とモノを隠すことができるのは高ポイントでしたが」

「……ちなみに何隠してたの？」

「発信機と戦闘訓練で窓を斬るのに使った高周波コンバットナイフとかですね。後は少しならブービートラップ用のカーボンワイヤーもあります」

ブローニャの発言のうちナイフくらいしかまともに理解できなかった芦戸は数秒の間目を点にした後――

「ニンジャ？」

「……否定はしません。どちらかと言えばアサシンの方かもしれません」

?

「ブローニャさん……だいぶこう、一新したね！」

「前回のコスチュームは機動性に難ありだったので変更してもらえませんでした。やはり動けるといいのはいいですね」

ブローニャは戦闘訓練時に着用していた次元限界突破のコスチュームから銀狼の黎明のコスチュームへと変更していた。

出久も前回のコスチュームとは別のものだ。というか、雄英高校指定の体育着である。

「そういえばデクくんはコスチューム着ないの？」

「あ、ブローニャもそれは思っていました。勝己のアレで焼け焦げてしまいましたか？」

「そうなんだ。今はサポート会社が修復をしてくれてるらしいからそれ待ち」

施設へと向かうバスに乗り込むA組一行。少し前のマスコミ騒ぎでの功績を称えられ委員長となった飯田が出席番号順に並ぶように張り切っていたが、後部を除いて左右に向かい合うタイプのバスだったために彼の頑張りも徒労に終わってしまった。

「こういうタイプのバスだったか……」

「張り切るのには構いませんが、無駄骨でしたね」

「くうー！」

バスが発進すると車内ではクラスメイトの個性談義が始まった。

緑谷の個性が蛙吹に看破されかけた時はヒヤヒヤしたブローニャだったが事情を知らないはずの切島が的確なフォローをかけてくれたので事なきを得た。

「でもやっぱり、派手で強え個性つつたら轟と爆豪だな！」

その声は両名の耳には届いていたようだが轟はスルー、爆豪はケツ！ とつまらなそうにそっぽを向いた。

「照れてますか？」

「爆豪ちゃんはキレてばっかだから人気でなさそ」

「照れてねえわ！出すわ!!」

「照れ隠しですね」「ホラ」

「てめえら何だコラ殺すぞ!!」

窓を眺める爆豪にブローニャと蛙吹が特大の釣り針を仕掛ける。見事引つかかった爆豪はその後上鳴の「クソを下水で煮込んだような性格」という火に油を注ぐような評価にツツコミながら憤慨した。

「もう着くからいい加減にしとけよ。それとテレサさん——」

「フアミ？」

「しれつと生徒に混じって菓子を食べないでください」

？

「痛い……個性消してからのチョップは反則でしょ!!」

「これ以上威厳を損なわれても困ります。暫く反省してください」

「クツ！ あたくしの完敗よ……ぐうの音も出ないわ」

デフォルメチックな画風になりながらハンカチを噛むテレサ。

外見は10歳そこらだが中身は四十路を超えるおば様と言われても問題ない年齢である。わざわざそんな地雷を踏むようなことを相澤が口に出すことはないが。

「皆さん！お——僕がつくったウソの災害や事故ルームへようこそ」

『USJだった!!!!』

全員が心の中でセーの！もないのにご唱和してしまった。

ここはスペースヒーロー13号が考案し作り上げた様々な非日常的な状況をシミュレーションするアトラクションだ。

彼女は自らの災害救助での経験を活かしてこの演習場を作ったらしい。

「あー、開始前に忠言を一つ、二つ……いや、頑張つてまとめるから気楽に聞いてくれていい」

「僕の個性は『ブラックホール』。どんなものでも吸い込んでチリにし

てしまうことができる」

この個性を最大限に生かして彼女は災害現場でめざましい活躍をしてきたのだが、一歩間違えば簡単に人を殺めてしまう力だと語る。彼女だけでなくこの場にいる全員が『いきすぎた個性』を持っているのだと自覚して欲しい。そう切に訴えた。

「この授業では心機一転して人々の尊い命を守るため、個性をどのように活用していくか一緒に学んでいこう。以上、ご清聴ありがとうございますございました」

恭しく13号が礼をすると緑谷の拍手を皮切りに皆パチパチと13号に惜しみのない拍手を送った。

「んじゃあまずは……」

相澤が本日最初のカリキュラムを言おうとしたところだった。U S Jの階段の麓、噴水広場のような場所に黒い淀みが生じる。

徐々にそれは膨張し、中からずるりと人の形をした途方もない悪意が顔を見せた。まるでこの世の全てを呪うかのような目をこちらへと向けた。

「全員ひとかたまりになって動くな!!」

相澤が櫂を飛ばしてゴーグルを装着、首に巻いていた捕縛布を緩める。

テレサは誓約の十字架を自身の背後に召喚し、その中から射出された矛を手にとった。

「なんだあ？また入試みたいなもの始まってんぞ！パターンか？」

「でもその割にはちよつとガチ過ぎる格好っていうかなんというか」

切島が呑気な顔をして眼下に広がるヴィランの群れを見下ろし、葉隠が訓練にしては、と恐らく頭があるであろう空間に疑問符を浮かべる。

「あれはヴィランだ！ 13号、お前は生徒たちを連れて避難しろ」

「了解し——ました。もしかしてお一人で食い止める気で？」

「二人でだ。テレサさんがいるから多少は楽になるだろう。万が一俺たちが突破された時は……頼むぞ」

「あたくしがいるからには万一なんて起こさせない。ええ、必ず守る

わ」

「珍しくやる気ですね」

「ちよつと？ いつも出してないみたいに言わないでよー！」

ザリ、とヴィランたちの方へと歩を進める相澤。彼らがここに来た理由は不明だが……出頭しに来たとかそういうことではあるまい。確実に、何らかの悪意を持ってここにいる。

テレサは十字架を扇のように展開、その中から放たれた多数の光の武具を空中で待機させた。

「レイザーヘッドの基本戦闘スタイルは奇襲からの捕縛だ。正面戦闘は——」

難しい、無理だ。ともかく緑谷はマイナスのイメージがつきそうな言葉を発そうとした。レイザーヘッドは片手を上げてそれを制し、ゴーグルの中の視線を向けてこう言った。

「一芸だけじゃ、ヒーローは務まらない」

「心配いらないわ。相澤はあたくしが守るもの！」

ヴィラン強襲②

イレイザーが階段を滑るように飛び降りながら前方に構える射撃部隊を視認する。

射撃部隊は馬鹿正直に突っ込んでくるヒーローを嘲笑いながら自らの個性の照準を合わせるが——視界に飛び込んできたのは蜂の巣になったヒーローではなく、仲間の顔面だった。

個性の撃鉄を起こすこともできない彼らは相澤にとつて格好の的だ。視界に星が煌めき意識が混濁した彼らに向かってテレサの光の矛が殺到する。矛は激突直前に光の鎖に形を変えヴィランをキツく縛り上げた。

「俺は前衛向きではないんですがね」

「じゃああたくしも前衛やるわよ。そのかわり援護は期待しないでよね！」

ボヤクイレイザーの背後でいつの間にかガイナ立ちをしているテレサ。前衛やる〜！と宣言した彼女はあろうことか中長距離射撃武器である十字架を両手に抱えて鈍器さながらにヴィランの腹を殴打しフィニッシュにはブーメランのように十字架を投擲した。

「十字架の空気抵抗を制約したのはまずかったですか？」

「息があるなら大丈夫でしょう。しかし……」

未だ不敵に笑うだけの数多の手に掴まれた男、そして身体の輪郭すら分からない霧を纏った何か、最後にその後ろに控える脳剥き出しの巨躯。こいつらはヤバい、そう彼の心がひどく警鐘を鳴らしていた。

？

「テレサ先生……そこそこ動けたんですね」

「アレはそこそこのレベルじゃないよブローニヤちゃん!?というか観戦してないで早く逃げよー!」

十字架を大上段に振り上げたテレサを見たヴィランはシスター服も相まって彼女の後ろに天国を幻視したことだろう。何故かこうも圧倒的だとヴィランの方がご愁傷さまという気分になってきたブローニヤ。

いつの間にか彼女はテレサとイレイザーの蹂躪を見入っていたらしい。すぐ行きます、と麗日に返事をして皆の元へ行こうとした。しかしブローニヤの視界の端でイレイザーと相對しているヴィランが一名、溶けるように消失した。

「お茶子！今すぐ皆を……」

時すでに遅し。振り向いたブローニヤの目にA組の約半数を覆い尽くした黒い霧が広がっていた。

「19c！」

ブローニヤの背後に創造された重装ウサギ19cは彼女の指示を受ける前にモヤへと突貫、一部モヤが隠れていない部分に鋭いジャブを繰り出した。

即座に反応した黒モヤは恐らく実態であろう部分を個性で覆ってその攻撃を回避する。

「おっと、危ない危ない。金の卵とはいえ油断は禁物。……では余った子どもたちはこちらで処分するとしましょうか」

モヤがぶわりと拡張し、その中から白い異形が顔を出す。

異常に発達した上半身、首と肩のない胴体、目のようなものすら確認できない頭部。凡そ人とは思えぬ怪物が十数体、門を守護するように陣取っていた。

「なんだありや？」

「ロボットとはまた違うみたいだが……」

「あれは人ではありません。熱源反応0、心臓に該当する部位も見当たらない。大方個性で作られた人形のようなものでしょう」

瀬呂と飯田が疑問を呈しそれにブローニヤが回答した。

「確かにこれは人形と言って差し支えないでしょうね。しかしあなた方の息の根を止めるにはこれで十分。——やれ」

黒もやの合図に反応して白き獣は目の前の対象を圧殺せんと進撃

を開始する。

——戦うしかない。

そう身構えた生徒たちを守るように13号が立ち塞がった。その姿に黒モヤは愉快げにその目を歪ませた。

「あなたの個性は近接戦闘には向いていない。確かに個性でコレを処理するのは簡単でしょうが……全員守りきることができますか？」

「ああできるとも。少なくとも『彼女』ではない『俺』ならば」

「俺」？とブローニヤ含むその場の全員が首を傾げた。

「このまま数時間、慣れない13号のフリをしているつもりだったが、そももいかなかった」

13号のガワが崩れるように消え失せる。中から現れたのは形容しがたい雰囲気をつらつら纏った男性だった。

短い茶髪にフチあり眼鏡、その手には紫色の宝玉のようなものを携えている。

彼は生徒を守るように赤雷迸る球体状の黒い力場を展開して黒霧を見据えた。

「シーリンは何処にいる？答えてもらおう、黒霧」

「これはこれは……我々は一本取られてしまったようですね。あなたがいるだなんて聞いていませんよ、ヴェルト・ヨウ」

「当然だ。今頃屋久島縄文杉ツアーに行ってる13号にしか言っただけだからな」

？

「相澤ア！」

「俺が行きます！」

「それを許すと思うか？やれ、脳無」

言い合いを取り止め即時に散開する二人。数秒前まで立っていた地面には巨大なクレーターが穿たれた。

下手人はもちろん死柄木の隣に佇んでいた巨躯の男。彼は恐らく異形型にカテゴライズされる個性なので正面戦闘を不得意とする相澤との相性はめつぽう悪い。

テレサは脳内のリミッターを『制約』することで火事場の馬鹿力状態を常態的に引き出すことで脳無との大立ち回りを繰り広げているがそれも長くは持たないだろう。

初手で脳無の抵抗力に制約をかけたが、あろうことか容易く光の鎖を引きちぎられてしまった。

誓約の十字架の『制約』効果は精神が強い存在には跳ね除けられてしまうというデメリットがある。

脳無は死柄木から出されたオーダーを一意専心に取り組むため、それ以外に対しての一切の雑念が存在しない。それ即ち意思がそれ以外に向かない、精神が強靱ということに他ならない。

「肉達磨の癖してすばしっこいわね！」

「そりゃそうさ。対オールマイト用に調整してあるからな。象徴に劣る有象無象のヒーロー共がまともに相手できるとでも思ってるのか？」

「ハッ！上等よ。床ペロさせてあげるから覚悟なさい！」

絨毯爆撃のように降り注ぐ矛で脳無の侵攻を妨げ相澤をゲートの方へと向かわせるテレサ。

拮抗は相澤が階段にたどり着くまでは稼ぐことができたが、負傷したものでもない脳無のショルダータックルによってテレサは投球をしくじったスライダーのように2、3とバウンドして地面を転がった。

「で、誰が誰を床ペロさせるって？」

「あたくしがその筋肉達磨をよ！」

自身の個性で痛覚に『制約』をかける。

まだ動けるならそれでいい。何としても生徒たちにこいつらの矛が向かないようにしなければ。

「難儀なもんだな。相手を縛る制約は一つ、されど自分を戒める制約は幾重にも重ねがけできる。まるで戒律に厳しい聖職者だ。あんたもう身体ボロボロだろう?」

「あたくしは不朽不屈よ? たかがウイルスに遅れをとるわけないじゃない」

「いいね、俄然それを壊してみたくなった」

死柄木はあろうことか脳無に手を出すなど支持すると、懐から小さな宝石のようなものを取り出した。黒と紅が入り交じったような色をした不気味なものだった。

彼はそれを付けていたネックレスのようなものにある窪みにカチリとはめ込んだ。

『Plague—gem install—』

翻訳アプリで読み上げられたような抑揚のない声が響く。

瞬間、死柄木の身体を紫炎が覆い尽くした。

テレサは怪訝に思う。彼の個性は触れたものを崩壊させる個性のはずだが……

「さ、初めよう。せめて10分くらいは耐えてくれよ?」

黒と紫が混じったような焰をさながら外装のように纏った死柄木は薄く、それでいて底の見えない悪意を孕んだ微笑みをテレサへと向けた。

外伝【個性災害：『崩壊』】

EX (I) 崩壊の産声

けたましい警戒音が響き渡り、警報灯が廊下を真紅に染め上げる。その赤光の中を紫色の影が軌跡を残して疾駆する。

彼女の名はシーリン。この研究施設——通称バビロンの塔で実験を施された子どもの一人だ。

バビロンの塔はシベリアの僻地に建設された個性研究施設だ。とある財団が多額の支援をしていることで有名だが、これといって目覚ましい成果を上げているわけではない——とされている。

その実態は個性の軍事使用を目的とした非人道的な実験を繰り返すブラックな研究施設だった。研究員の福利厚生はホワイトらしい。個性増強薬、個性の『物質化』、精神的負荷による個性の変質 e t c……。彼らはその研究成果をもってして死の商人としてやっていこうという魂胆だったようだが、いき過ぎた実験は彼ら自身の首を絞めることになった。

幼少期、シーリンは無個性と診断されていた。個性が発現しないことに肩を落とした両親だったが、そんな彼らにバビロンの塔の職員が接触する。

——我々の研究によって無個性の彼女も個性を発現できるようになるかもしれません

その口車に乗ってしまった両親は良かれと思ってシーリンを職員たちに引き渡した。全ては彼女の幸せを願ったことである。

彼女も最初は両親が自分を気遣ってくれたことに感謝した。しかしその心は日に日にドス黒い感情で埋め尽くされていった。

形容するのも憚られるような狂気の実験に彼女の精神はゴリゴリと削られていく。

その溜まりに溜まった負の感情がトリガーとなったのか、はたまた

彼らの研究が成功してしまったのか、今となっては分からないが、シーリンは個性を獲得した。

彼女の個性は『亜空掌握』。実数空間の裏側に存在する虚数空間を掌握し、様々な力を行使できる個性だ。

自分の個性の目覚めに気づいた彼女はひとまず、周囲に蔓延る塵芥を一掃した。彼女の実験を担当した職員が生きていた痕跡は壁と彼女に飛び散った血潮だけとなった。それまで人だったモノが辺り一面に散らばることを彼女が許すことはない。

そして冒頭の場面へと至る。現在彼女が向かっている先は彼女以外の子どもたちが収容されている部屋だ。

恐らく彼らは子どもたちを人質にするだろう。こいつらを殺されたくなければ大人しくしろ、と。

——しかし彼らは見誤っていたのだ。彼女が目覚めた力がどれほどのものかということ。

子どもの頭に銃を突きつけた職員は彼女の個性によるワープで外に放り出された。ここはバビロンの『塔』。塔と呼ばれる由縁はその天を穿つような高さに起因する。子どもたちが収容されていた部屋はスカイツリーを優に超える脅威の700mの地点に位置する。彼は最初で最期のスカイダイビング（パラシュートなし）を楽しんだことであろう。

シーリンは子どもたちを空間転移で安全な場所へと転送しようとするが、子どもたちはシーリンと一緒にこの場所を壊そうと僕も私もと口々に騒ぎ出した。

だが、シーリンは首を振った。「ダメだよ」と。

彼らも大なり小なりこの場所に恨みを抱いていることだろう。だけど、彼らはまだ引き返せる。もう事を成してしまった自分とは違って、その手は血に汚れてなどいないのだ。シーリンに残った最後の人間らしい心だった。

「あんた達の方までお姉ちゃん、頑張っちゃうんだから☆」

渋々納得した子どもたちを今度こそ安全な場所へと転送したシーリンはその目を、口を、狂気に歪ませた。

？

職員たちをなぶり殺していくうちにシーリンは自身の中の何か
崩れたことを感じた。

何が崩壊したのかは分からない。が、何か強い力を手にした気がす
る。シーリンは気の赴くままに空を裂くように手を振るった。

その宙に広がった時空の裂け目の中から不思議なモノが産まれ落
ちた。

人とも獣ともつかない、白いボディに淡い赤色のラインをもつ何
か。どうやら彼らは自分の言うことを聞いてくれるらしい。一個体
に絞れば細かい指示をすることも可能だが、その個体数が増加するに
つれて大雑把な命令しか出せなくなるようだ。

塔の全ての職員を駆逐した後、彼女は眼下に広がる世界を見下ろ
す。ああ、何もかもが妬ましく見えてしまう。私はもつと幸せになれ
たはずだ。

「多分あれで全員じゃない。まだ、もつといたはず」

「殺すわ。一片残らずに、ね」

統括者からの意志を受け取ったモノ——崩壊獣たちは彼女の意志
を全うするためにゆっくりと行動を開始した。